
おしどり夫婦へ

廉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おしどり夫婦へ

【Nコード】

N0166E

【作者名】

廉

【あらすじ】

お互いに最低最悪な形で出会ってしまった20歳の孝介と美咲。しかし、親の都合で無理やり連れてこられた見合いの席で再会。恐怖の見合い、恐怖のデートを繰り返す。はじめはお互いに嫌っていたが、いつしか2人は心を通わせていくようになる。損な男と暴力女の結婚までの不器用な恋愛をお楽しみください。

第1話 最悪な出会い

僕と彼女の出会い是最悪だった。

今まで20年間生きてきたが、特に変わったこともなく普通に過ごしてきた。しかし、桜も散った春の日、僕は彼女と最悪な形で出会った。

大学生になつて3度目の春、その日は僕の所属するサークルの新歓コンパが行われていた。大学近くの焼肉屋をほとんど僕たちが占領して、数少ない客に迷惑とも思えるほど大きな声で騒ぎまくった。

9時を過ぎて、酔いが回った連中は自分勝手に一気飲みをし始める。僕はそれを遠巻きに笑って見ていただけだったが、唐突に僕の目の前にビールジョッキがどんと置かれる。

同じ3年生の三田篤志みたあつしだった。女たらしで軽い男だったが、不思議と気が合つて、僕たちはサークル以外するときでもよくつるんでいた。

「孝介けいすけも飲めよ。あんま今日飲んでねえだろ」

飲まないことには理由があった。酒は好きだが非常に弱く、酔うととにかくおしゃべりになるのだ。新入生が入ってきたばかりだつていうのに、初めから自分の印象を悪くさせることは避けていた。しかし、勧められると断れないのも僕の性格だ。

「じゃあ、1杯だけ飲むよ」

それで済むのなら話は簡単だ。結局僕は勧められるがままに飲み続けてしまった。

10時過ぎ、さすがに飲みすぎて頭がクラクラしてきた。気分も最悪に悪かったので、三田に一言言って、先に帰らせてもらうことにした。

「顔赤いぞ。飲みすぎたか？」

去り際に三田にそんなことを言われた。

「お前が飲ませたんだろ」

本当の話だから、三田も否定はしない。

僕は眠くなるのを必死で抑えて、電車に乗り継ぎ、駅に停めてある自転車を引いた。明日は絶対二日酔いだ。それを考えると憂鬱ゆううつになる。まだ酔いは醒さめていなかったが、頭だけは妙にはっきりとしていた。

ちょうどトンネルに差し掛かったときだ。目の前に突然人が降ってきた。正確には、人気ひとけのないトンネルから誰かが吹っ飛んできたのだ。

何が起こったのか、慌ててトンネルを見ると、数人の人影が見えた。なんとなくシルエツトで女の人が1人いるように見えた。最悪な事態が頭の中に浮かんできて、僕は自転車を放り投げて駆け寄る。しかし、駆け寄ってみてすぐに異変に気づいた。女自身が尻餅しりもちをついている男を蹴り飛ばしているのだ。彼女はさらに追い討ちをかけようとする。僕は無意識に体が動いた。

女の動きが止まったのは、僕が彼女の手首を掴んだからだった。そのとき、初めて目が合った。意志の強そうな目、薄い唇、ポニーテールに縛られた綺麗な髪の毛、暗いトンネルの中でもわかる。かなりの美人だ。

瞬間、その女の腕が襲い掛かってきた。僕は間一髪でなんとか避ける。同時に、後ろにいた男たちが逃げていくのがわかった。

「邪魔すんな」

それが、その人の第一声だった。彼女の足が僕の顔面を狙ってくる。僕は一步退く。

「あんたこそ何してんだよ！暴力だろ……！」

「先に手を出してきたのは向こうだ。あっちが悪い」

よくやく解放してくれたと思ったら、そんなことをあっさりと言つてのけた。確かに、それは事実なのかもしれないが、3倍返しに

も程がある。

彼女の立ち姿から、第一印象が猫のようだと思った。別に猫顔というわけではない。ただ、警戒心の強そうな態度がそう見せたのかもしれない。

「だからってやり過ぎだよ。こんなのただの暴力だ」

僕はいつになく強い口調で言う。女が鼻ではっと笑った。

「じゃあ、向こうが手を出してきたのは暴力じゃないっていつの？」「そうじゃない。女の子なんだから3倍返しみたいなことするなって言ってるの」

なぜ僕は見知らぬ暴力女に説教しなければならぬのだろう。普段の自分からは想像もつかなかった。大学でもサークルでも、どちらかという僕はあまり喋らないほうだった。だから、今日の僕はどこか変だったのだ。

「3倍返しじゃない、10倍返しだ。それから、女だからとかそういうこと言うのやめろ」

そのとき、女がファイティングポーズをとると同時に襲い掛かってこようとする。

「冗談じゃない。何なんだこの女は・・・」

僕は180度向きを変えて一目散に逃げ出していった。これ以上関わり合いになるのはごめんだった。意味不明な叫び声をあげて追いかけてくる彼女を振り切って、とにかく自転車をこいだ。酔いなんてとつくに醒めていた。

これが、僕と彼女との出会いだ。

とにかく第一印象はお互いに最悪だったと思う。だから、誰がこのとき予想できただろう。

僕と彼女が1年以内に結婚して夫婦になるなんて。

4月も終わりに近づいた頃、いつもは8時以降にならないと帰ってこない父が、久しぶりに仕事を早く切り上げてきた。ちょうど、

土曜日で大学も休み。母も特売をやっているスーパーに買い物に出かけたから、家に父と僕の2人だけになった。

その父がいつになくソワソワとしている。そういうときは何か言いたいことがあるときだ。ソファアに座って新聞を読みながら、ちらつと僕を見ている。

「何？言いたいことがあるならいいなよ」

観念して僕から口を開く。父の顔がぱあっと明るくなった。嫌な予感がした。

「いやあ・・・実はこんなこと・・・お前に頼むのは、悪いとは思ったんだが・・・」

「やべっ！用事思い出した」

僕はすくつと立ち上がってリビングを後にしようとする。

「ちよつと待ってー！！」

ずるずると僕の足にしがみついてくる父。

「俺の一生がかかってるんだ！頼む！少しおとなしくしてくれ！」

「はあ？どうしたんだよ！？」

僕の意見なんて聞かずに、父は僕を玄関まで引きずっていき、そのまま怪力で家の目の前に停まっていた車の後部座席に放り込む。父も続いて乗り込んだ。

「待ってよ！どこ行くだよ！」

運転席には、買い物に行ったはずの母がすでに座っていた。車は勢いよくスタートする。

その尋常ではない態度に、さすがの僕も不安になってきた。もしかしたら、親戚の誰かの身に何かあったのかもしれない。だから、2人ともパニックになっているのだ。今学校の部活に行っている妹に連絡するのを忘れているのかもしれない。

しかし、着いた所は病院ではなかった。高級料亭のようだ。

「これに着替えて」

母がおもむろに渡してきたのは、なぜかスーツだった。見た感じでは喪服には見えない。

「どづいつことだよ？ちゃんと説明しなきゃわかんねーよ」

「いいから。着替えなさい」

そんな母の強い口調は初めてだった。仕方なく車の中でいそいそと着替えた。父に連れられて、料亭内に入っていく。なんだか嫌な光景が頭の中に浮かんできた。

掃除の行き届いた廊下を僕たちは歩いていく。前を歩く父が口を開いたのはこのときだった。

「孝介、聞いてくれ。お前には今から見合いをしてもらおうから」

「はっ？何言ってるんだよ！？冗談やめろっの！」

僕の足が止まった。父が怖い顔してくるりと振り返った。

「頼む！俺を助けると思ってる……相手は上司の娘さんなんだ。べっぴんだぞ」

そういうことを言っているのではない。僕は話にならないと思って帰ろうとするが、父に後ろ襟えりを掴まれる。

「俺の出世がかかってるんだよ」

僕の頭に一気に血が上った。

「冗談じゃない!!!」

その声を出したのは確かに僕だったが、僕とは別にもう1人そう叫んだ人がいたらしい。ちょうど同時に声が重なった。

すると、前方数メートル先の障子が開いた……というより押し倒されてはずれた。すぐに着物姿の女性が飛び出してくる。女性は一旦部屋の中にいる誰かに向かって大声をあげた。

「タダ飯食わせてくれるって言うからこんな格好までしてここに来たんだ！お見合いなんて聞いてないよ!!!」

ん？どこかで聞いたことのある声だ。

女性がくるつと向きを変えたところで、初めて僕たちと目が合った。今やつと僕たちに気づいたらしい。彼女は驚いた顔で立ち止まった。

それにしてもなんて綺麗なんだろう。僕は今まで怒っていたことを忘れてしまった。着物美人とはこういう人のことをいうのだろうか。

それにしてもどこかで見たことがあるような気がするのはいのせいでだろうか。

「……思い出した。こないだの最低男…….」
低い声だった。それがきつかけかどうかはわからないが、ようやく僕もその人が誰だかわかった。

「トンネルの暴力女！」

「うるさい」

そのとき、暴力女の後ろからおじいさんが出てきた。彼は父を見てにこやかな笑みを浮かべてくる。

「これは葉山さん。今日はよろしくお願いします」

「いえいえ、こちらこそ。あ・息子の孝介です」

父が媚こびを売るような態度でぺこぺこ頭を下げる。この態度の急変ぶりには驚かされた。僕は後頭部を押されて、しびしび頭を下げることになった。

「はい、孫の美味です」

そのとき、ようやくわかった。僕の見合い相手はこの暴力女なんだ。

まさに最悪な形での再会だった。

第2話 非常識なお見合い

僕が20年間生きてきて抱いていた見合いに対する印象は、もつと互いに気を遣って、敬語でやり取りするものだった。しかし、こんなのは見合いじゃない。当の本人たちが不機嫌で一言も喋らず、親同士が勝手に会話しているだけだった。僕はただ目の前に出された料理を食べているだけだった。

「おい、孝介。お前も照れてないで何か喋ったらどうだ」

突然隣に座っていた父に話を振られた。照れるなんて冗談じゃないと思いつながら、なんとか渋面を隠して父のほうを向く。さっきから腕をつねられているのが痛かった。

喋ると言っても、この女と喋りたい話はなかった。オーソドックスに「ご趣味は？」なんて聞いた暁には、「人の顔を狙うこと」と返ってきたので、僕は必死になって別の質問を探した。暴力女はともかく、彼女のおじいさんを困らせたくはない。

思いついた質問はやっぱりオーソドックスだった。

「ええ・・・っと、得意な料理は何ですか？」

こういうときなんて答えられたら男はぐつとくるのだろう。イメージでは「肉じゃが」が1番定番のような気がする。

しかし、美咲とかいう女は一向に答えようとはしなかった。もぐもぐと料理を食べ続けている。無視されているとわかると、だんだん腹が立ってきた。

「いえ・・・美咲は何でもできますから、得意な料理なんてないんですよ・・・」

おじいさんが必死になってフォローしている。僕の中で、ますます美咲の好感度が下がった。ここまで人間嫌いになったのは初めてだった。父には悪いが、こんな見合いをさっさと終わらせてしまおう。

それから父と相手のおじいさんの会話が進む。時間がやたら長く感じられた。僕は早く時間がたつのを待っていた。

しばらくして、父がよいしょと腰を上げた。

「それでは、そろそろ私たちはおいとましましょう」

「そうですね」

ちよつと待て！僕は思わず父の裾を掴んだ。なぜだか父が涙目になって、きつと僕をにらみつけてくる。そんな顔をされたら、何も言うことができないじゃないか。

障子の向こう側に消えた父の姿を僕は未練がましく見続けた。

「お前」

まるでこのときを待っていたかのようなタイミングの声だった。

僕はぎくつとなって振り返る。美咲がその服装、その顔に似合わない形相で見えてきた。

「好き嫌いすんなよ」

「はっ？」

予想もしていなかった言葉に、一瞬面食らった。しばらくしてようやく、僕がしいたけの天ぷら等キノコ類を残していることを言っていることに気づいた。人の質問を無視するくせに、こついうことに目ざとく目を光らせているらしい。

「キノコ残すな」

「しょうがないだろ。キノコは全体的にダメなんだ」

そのとき、僕の左頬を何かがかすった。美咲の箸だった。

「だからって残したら作った人に申し訳ないだろ」

「だからって箸投げることないだろ！」

それが精一杯の反撃だった。確かに、美咲の言うことは最もだ。それ以上反論することもできずに、僕は美咲の投げた箸を拾うことなどなんとかその場を取り繕う。だが、顔を上げたとき驚いてしまった。

どこから取り出したのか、目の前で美咲はつまようじで歯の掃除をしている。

「堂々とすんなあ！！女だろ！！」

すると、彼女は心底うんざりしたような顔でつまようじを乱暴にテーブルに叩きつける。

「あんたって女ってモンを何だと思ってるの？綺麗な服着てスカートはいて、おしとやかににこにこしてるのが女だと思ってるの？寝言は寝て言いなよ。今時そんな人なんていないっつーの」

僕は言い返せなかった。無意識にかやくご飯の中に入っていたえのきを避ける。

「だーかーらー・・・残すなっつってんだろー！！！」

「わっ！」

何を思ったのか、美咲はテーブル越しに僕の胸ぐらをつかんでくる。なんていう怪力女だ。そのまま柔道のナントカ投げで僕は宙に浮いて背中から落ちる。受身の取り方なんて知らなかったから一瞬目の前が真っ暗になった。

なんとか起き上がるとすぐ目の前に着物が見えた。

「ちよーど良かった。こないだの決着着けようじゃないか」

何なんだ、この女は。僕は口をぱくぱくとさせていたが、何も言葉が出なかった。大学にだってサークルにだってこんな人を見たことがない。そもそも常識という言葉を知っているのだろうか。

しかし、殴り合いのケンカを始めると思っていた僕の予想は外れた。美咲は反対側の、つまり僕が座っていたほうのテーブルにまわり、袖をまくる。彼女の細い腕がテーブルに出された。ひじをついたその格好はまるで、

「腕ずもっ・・・？」

心底間拔けな顔で僕は尋ねる。一方、美咲は真剣に怖い顔でこくんとうなづく。

「早くしろよ。まさか負けるのが怖いのか？」

「言ってるよ。後で泣いても知らないからな」

僕も右腕を出す。自慢ではないが、腕ずもっには負けたことがない、たぶん。

彼女の手を握った瞬間だった。僕が小さい手だなと思った約0.1秒後にいきなり腕ずもうが開始された。レディーゴーの一言もないなんて卑怯だと思いつつも僕もついつい本気になってしまう。相手はなかなか強かった。

そのとき、テーブルに全体重がかかってしまったのかもしれない。おそらく彼女も。テーブルの隅のほうで繰り広げられた激しいバトルに便乗してか、テーブルが一気に傾く。

「わあっ!!」

支えを失った僕たちの体が畳に押し付けられる。同時に、テーブルの上にあつた皿や小鉢が落ちてきた。テーブルはどしんと音を立てて、何事もなかったかのように元の状態に戻った。

しーんと静かになった。

しばらくして障子が開いた。父とおじいさんの姿がある。その光景を見て、まるで僕が美咲を無理やり襲った後のような光景だった。

「孝介ー!!お前って奴はー!!」

僕は慌てて首を振った。父はつかつかと歩み寄ってくる。

「誤解だー!何にもしてない!!」

むしろ被害者は僕のほうだと言いたかったが、そんなことを信じてもらえるはずがなかった。父は僕をぽかっと一発叩いてから、美咲のほうに向き直った。

「悪気があつたわけじゃないんです!どうかこれからも長くお付き合いをお願いします!」

「ええ。今日はとても楽しかったです。私もまた会ってくださると嬉しいんですが……」

かわいらしすぎる声で逆に僕は鳥肌が立った。この暴力・怪力女がこんな猫なで声で、しかももう1度僕に会いたいと言っている。

絶対に裏がある。怪しい。関わっちゃダメだ。

しかし、僕の意思に反して、父とおじいさんは嬉しそうに顔をぱあっと明るくさせた。

「ありがとうございます！良かったな、孝介！！」

僕はこのとき、どんな顔をしていたのだろうか。

とにかく、僕たちはそれからケータイの番号とアドレスを交換し、また次に会う約束をしまった。勝手に着信音も設定された。

「それじゃあ、また後日」

父がその日何度目かになるかわからないくらい深々と頭を下げ、僕たちは別れた。帰りの車の中で、父はうきうきと歌を歌い、僕は怒る気力も失せてただぼーっと夜の道を走っていた。

見合いから3日後のことだった。サークル室でごろごろとしていると、突然ジヨーズの挿入歌が流れた。どうやら僕のケータイが鳴っているようだった。たっぷり時間をかけてケータイに出る。嫌な予感がしていた。

『遅い！12コール目なんて非常識だ』

それを言うなら、君だって非常識だよ。僕は胸中で電話の相手に言い返した。

第3話 俺を選べ

人を待つことと待たせること、どちらが嫌かと聞かれたら、僕は後者を取る。だから、待ち合わせ時間にはだいたい5分前には行くようにしている。例え相手がどんなに非常識で怪力で暴力女だとしても、僕は少し早めに待ち合わせ場所に向かった。

驚いたことに、待ち合わせ相手はすでにそこで待っていた。僕を見つけると、笑顔のかけらも見せずに、

「遅い！レディーを待たせるなんて人間失格だ」

君に言われちゃおしまいだよ。もちろん口には出さない。出せば余計ややこしいことになるよ。この短期間の経験で思い知っている。

「で、どういう風の吹き回しだよ。今度は何企んでんだよ」

僕は美咲の服装を観察しながら尋ねた。ブーツカットのジーンパンに白っぽい七部袖。春らしい格好だった。この性格と口調がなければ、学校ではモテモテだったんじゃないかと思う。そういえば、僕は父の上司を美咲の父親かあのおじいさんかと思っていたのだが、見合いが終わった後父に聞いてみるとそうではないらしい。詳しい話は聞かなかった。

「ただのデートだったの。電話で何度も言っただろ」

説明するのも面倒くさそうだ。

「へー・・・てつきり嫌われてるのかと思ってましたけど」

「嫌いだよ。でも、頼める相手が他に思いつかなかったからさ」

「頼み？」

きょとんとして聞き返すと、真顔で美咲はうなずいた。綺麗な黒髪が風になびく。

「私、もうすぐ大会社の跡取り息子ってヤツと結婚すんだ。その前に1度でいいからデートっぽいことしてみたかったんだ」

素っ頓狂な声が出そうになるのを僕はなんとかこらえた。父もおじいさんもそんな話一言もしていなかったじゃないか。もしこんな

光景を見られた日には、まるで僕が不倫相手みたいだ。

「なんで見合いなんてしたんだー！」

「あれはじーちゃんか勝手に準備して、私は騙されて来たんだよ！見合いなんて知ってたら来ない！第一、跡取り息子との結婚だって父さんが勝手に決めたんだ。これでアンタとの浮気がバレて婚約が破談になるんなら、そっちのほうが都合」

なるほど、それを狙ってたわけか。僕はようやく納得した。おじいさんが何を考えているのかはわからなかったが、僕としてはこのままデートをするわけにはいかない。

そのときだった。僕は背中に誰かの視線を感じた。昔からこういう悪質な視線にはなぜか敏感だった。なるべく頭を動かさないように目だけで振り返ると、視界の片隅にこちらを窺^{うかが}っていると思われる男性の姿が目に入った。

「気づいた？」

何でもないことのように美咲は言う。尾行という文字が頭の中に浮かんできた。

「お前、知ってたのか？」

「こんなのあいつと初めて会ってからずっとだ。たぶん婚約者の行動を四六時中監視してないと気がすまないんだろ。よく部下が交代して私を張ってるよ」

ふうとため息をつく。もう慣れっこのようだった。僕だったらノイローゼになってしまいそうだ。誰かにずっと見られている生活なんて。ひよつとしたら、そんな美咲を気の毒に思っ、おじいさんは新たな見合いを考えたのかもしれない。なかった。

「……ねえ……婚約者のこと好き？」

それは確認の意味を込めた質問だった。美咲は何を今さらというような顔で、

「大っつっつっつ嫌い！！！！！」

はは、と僕は笑ってしまった。少なくとも僕よりも嫌いらしい。

「いいよ。デートすっか」

そのとき、なぜデートしてもいいという気持ちになれたのかはわからなかった。同情したわけでも、好きになつたわけでもない。たぶん初めて美咲の人間らしいところを見て興味を抱いたんだと思う。そんなどうでもいいきっかけだった。

僕だって20歳なんだから、デートの1つや2つしたことがあるが、それにしても今回のデートは人生で最も恐ろしかった。

とりあえずデートといえば遊園地と美咲が言い出して行ってみたものの、どのアトラクションに乗っても2、3組後に必ず尾行男が1人でジェットコースターに乗ったり、お化け屋敷に入ったり、試しにコーヒークップに乗ってみたら、やっぱり1人で乗っていた。

1番驚いたのは僕がトイレに入ったときだった。何気なく鏡を見ていたら、突然後ろに尾行男が現れたのだ。驚いて振り向くと、男は僕のほうなんてまるで見ていなかったかのようにすーっと通り過ぎていった。

しかし、それでもこんなに楽しいデートは初めてだった。僕は女の子とのつきあい方が下手で、いつも変に気を遣ってしまつてすごく疲れるのだ。今回の美咲の場合、お互いに本性をさらけ出しているの、今さら気を遣うことなんてなかった。わがままも文句も簡単に言える。

それに、美咲がただのアイスクリームを食べておいしそうな顔をしている姿はなんとなく微笑ましかった。今まで奇声をあげて暴力をふるっているところや、綺麗な着物を着ているくせに柔道の技をかけてきたところしか見たことがなかったの、妙に新鮮だった。

「なにアホ面してんだよ」

まあ、中身は全然変わっていないが。

「してねーよ。アイスおいしいんかなーって思つて」

「うまいよ。食ってみる？」

何気なく差し出されたアイスカップを僕はこけしでも出されたように見つめた。僕は人間不信になりそうだった。世の中わからない

ことだらけだ。

僕はおずおずと手を伸ばして美咲のカップを手に取る。自分のスプーンで一口食べてみた。バニラの味が口の中に広がっておいしかった。

「うまい」

率直な感想だった。そんな僕の反応を見て、

「だろ？」

美咲も笑った。何かを企んでいた笑みではなく、純粹な笑顔を見たのは初めてだった。暴力女といえども、やっぱり女の子だ。

だんだん武藤美咲という人間に興味を持ち始めている自分に気づいた。

午後7時ごろ、僕たちは遊園地を出た。もう少し待っていればパレードが始まるのだが、僕も美咲もパレードを見るために場所取りをしておくほど熱がなかった。アトラクションに乗るだけ乗って、すっかり満足してしまった。

せっかくのデートだ。僕は海の見える展望台に寄ろうと提案してみた。嫌だと言われればそれまでだが、意外にも彼女はすんなりとオッケーしてくれた。ひよっとしたら、彼女は気を許した相手には素直になるのかもしれない。

失敗したことに気づいたのは、展望台に登った後だった。この時間、海は真っ暗なんだ。

美咲は見ても面白くない望遠鏡を覗いている。

「今日はありがとな」

覗きながら、美咲はぼつりとつぶやいた。身を乗り出していた僕はそのお礼の言葉に驚いた。

「アンタは嫌いだけど、今日は楽しかった。ムカつくけど、デートにつきあってくれたこと感謝してる。言いたくないけど、ありがとう」

一言どころか、三言くらい余計な気がするけれど、僕は素直にお

礼を受け止めた。と、同時に少しだけ悲しくなった。その美咲の言葉でなんとなくわかった。もう僕たちは二度と会わないだろうというところが。僕がこれに答えてしまったら、もうお別れだ。

「そういうことでしたか・・・さあ、美咲様帰りましょう」

答えたのは、僕ではない。今まで尾行してきたあの男だった。なぜかわからないが、途中からすっかりその存在を忘れてしまった。まさかこんな所にまで現れるとは・・・

「今日のことは見なかったことにしてさしあげます。もう十分でしょう。早くお戻りにならないと、部長がご心配さないます。さあ・・・」

僕は言い返そうとしたけれど、美咲はあっさりと男の言葉に従った。その反応に驚いた。いつもの美咲なら相手をぶん殴ってでも黙らせるはずだ。ドッペルゲンガーじゃあるまいし、一体どうしたのだろうか。今日は、ただ男と一緒に去ろうとしている。

そのとき、美咲がくるりと僕を振り返った。いつものように無表情だった。

「じゃーな。覚えとけ」

何をだよ。僕はそう思いながら最後の美咲の顔を見た。ほんの一瞬だった。なんとなくだった。美咲が泣きそうに見えた。胸が痛んだ。

「待てよ!」

無意識に叫んでいた。それに反応して尾行男が振り返る。違う、アンタに振り返ってほしいわけじゃないんだ。僕はその暴力・怪力・自分勝手女に振り返ってほしいんだ。

「ほんつと自分勝手に、すぐ暴力ふるうし、非常識だし、こんな女ごめんだよ・・・もう最後にしたい。選べよ。その大会社の息子と結婚して後悔するか、ここにいる人全員ぶつ倒して自由になるか・・・俺を選んで一生後悔するか」

美咲が驚いたような顔をして振り返った。彼女の困惑した顔が新鮮で面白くて見ていて飽きない。僕はただそれだけを考えていた。

風が鳴る。潮の匂いが鼻をくすぐった。

「俺を選べ！美咲！」

瞬間、尾行男が仰向けに倒れた。別に僕の言葉が面白くてずっこけたんじゃない。美咲に顔面フックをくらったんだ。美咲は僕の腕を掴んで、そのまま猛スピードで展望台の階段を下っていった。僕は足がもつれそうになるのをなんとか堪えた。

「あーあ……これで私の人生めちゃくちゃだ」

走りながら美咲はため息をつく。だったら思わせぶりな顔するなよ、と僕は胸中で悪態をついた。運動不足で息があがった今の状態では何も言い返せないが。

階段を下り終えると、突然彼女が立ち止まって振り返った。

「責任とってもらおう」

「もういいよ。君には何言われたって驚かない」

「今度私の父さんに会ってもらうから」

驚かないなんて無理だった。話が飛躍しすぎではないだろうか。僕は口をぱくぱくとさせたが、美咲は真剣な顔で僕の返事を待っている。本気だ、彼女は本気だ。

僕はただ笑えてきた。人間どう転べばこんなことになるのだろうか。

第4話 彼女の両親に会うとき

父に会ってもらおうと言われてから約1ヶ月。あれつきり美咲からの連絡はなかった。

最初はすぐに電話がかかってくると思っていた。しかし、何の音沙汰もない。試しにメールを送ってみたが、返事は返ってこなかった。

ジョーズの着信音。これほどまでにジョーズを待ち望んだ人でもないだろう。

「おい！孝介、起きろよ」

三田篤志みたあつしに耳元で声をかけられて、僕は深い闇から目が覚めた。

ここが大学の教室内で、たった今授業中だということにようやく気づく。大勢の学生がこの授業を受けているため、講師が話している間も騒がしくて寝ていてもバレないのだ。

「なんだ、篤志か」

「誰だと思ったんだよ。ケータイさつきからずっと鳴ってんぞ」

はっとした。ジョーズの着信音が鳴っているのだ。この着信でかかってくる人なんてたった1人しか思い当たらない。

僕は慌ててケータイを手に取った。

「もしもしっ！」

『遅い！18コールなんて遅すぎだ！』

久しぶりの声に僕はわけもわからず感動してしまった。篤志がじろじろと見てくるのを感じて、少し声を抑える。

「なんで今まで連絡してこなかったんだよ？」

『こつちにだっているいろいろ事情があるんだよ。ねえ、今から出られない？』

まだ授業が終わるまでには30分以上ある。時計を見てから頭の中だけで考える。

『今大学の前まで来てるんだけど』

「は？」

僕は机の上に出してあった筆記用具を片付けてかばんの中に放り込んだ。篤志に先に帰るとだけ伝えて教室を飛び出していく。全速力で走った。数分後、大学の正門近くに見知った人を発見したて、駆け寄っていく。

「孝介」

初めて名前を呼ばれてどきっとしてしまった。美咲は照れた様子もなくけろりとしている。

「こないだ責任取れって言ったこと覚えてる？・・・父さんに会ってほしいんだけど」

美咲にしては控えめな態度だった。それを意外に思ったが、僕はいいよとうなずく。すると、ほんの一瞬すごく安心したような表情を見せた。なるほど。ひよっとしたら、彼女なりに不安だったのかもしれない。

「あのさ・・・つきあいたいって言っちゃうけど、いい？」

美咲の一瞬の表情も見逃さないように僕はまっすぐ見つめて尋ねた。しかし、今度の反応は一瞬よりも長いものだった。僕は人が頬を赤くする瞬間を初めて見た。すぐに顔を背けられたが、美咲は確かにうんとうなずいた。

こういうのをツンデレキャラというのだろうか。やばいな・・・会えない時間が愛を育てるとい言葉は本当なのかもしれない。僕は口元を手で覆って、美咲に顔を見られないように隠した。

電車で10分、バスで25分。案内された場所は日本の伝統的な家と呼ぶに相応しい所だった。まず、敷地面積が広い。僕の家何倍あるのだろうか。第2に、庭に池と鹿おどしがある。一体どんな家なんだ。第3に、玄関口に大きな門。

美咲が門の敷居をまたいだ所で僕は立ち止まってしまった。不審に思った彼女が僕を振り返る。

「どうしたんだ。今さら怖気づいたなんて言うなよ」

「違うよ。でかい家だなんて思って」

美咲って本当はお嬢様なんじゃないかと今さらになって気づき始めた。

通された部屋は鹿おどしは見えないが、その音が聞こえる静かな和室だった。まん中には大きな黒い机があり、奥の掛け軸には墨で何か書かれてある。全く読めないが。

しかし、着のみ着のまま来てしまったが、こんな格好でよかったのだろうか。それに、美咲の父親に会って何を言えればいいのだろうか。僕の中に生まれた今さらな迷いが頭の中でぐるぐると回り始めた。

「すまない。待たせてしまった」

急に背中に声がかかって、僕の心臓が飛び上がった。振り返ると昭和を生きた威厳のある一家の大黒柱がそこに立っていた。白髪混じりの武藤さんが上座にどしんと座る。

僕は慌てて正座で背筋を伸ばした。一方、美咲はあくらをかいたままだった。

「はじめまして！葉山孝介といいます。まずはこの間の・・・あの、美咲さんの婚約者」

「それについては私からも礼を言おう。美咲を四六時中監視する男となんか結婚させられない。婚約解消にできたことでは君に感謝している」

少しだけ拍子抜けした。美咲の父親だ。このことで肋骨の1本や2本持っていていられるかと思って、1ヶ月間筋トレをしてきたが、どうやら取り越し苦労だったらしい。まさかお礼を言われるなんて思ってもみなかった。

僕は少し安心してしまったのか、一気に緊張感が解けてしまった。次の言葉を発しようとしたとき、

「だが、君と美咲の交際を認めるわけにはいかない」

と言われたときには驚いた。武藤さんの眉間にしわが寄っているのが見えた。

「あの・・・今日はそれを認めてもらいたくてここに来たんです！」
「うるさい！どこの馬の骨ともわからんヤツに美咲を任せられるか！！！」

その大声でびくつとなつてしまった。もし目の前にちやぶ台があったらひっくり返していたと思う。それくらい武藤さんは恐ろしかった。僕は威圧感に押されて今まで見たことないほど縮こまってしまったが、負けるわけにもいかない。

「お願いします！！僕は本気なんです！」

「まだ言うかあああ！！！」

「許していただけの程度だつて言います！お願いします！！！」

僕は土下座をして懇願する。やはり美咲の父親だ。とうとう僕は胸倉を掴まれた。その力が強すぎて、筋トレ効果もどうやら薄そうだ。観念して目を瞑る。

しかし、いつまでたつても殴られる気配がなかった。恐る恐る目を開けて僕は驚いた。いつのまにか僕をかばうようにして、美咲が僕と武藤さんの間に入ってきたのだ。武藤さんは右手の拳を娘の顔面の手前で止めていた。美咲が現れなかったら、僕は見事な顔面ブツクをくらっていたことになる。

「言つたはずだろ。孝介には手を出さなつて」

静かに言つてのけると、眉間にしわを寄せていた武藤さんが急に涙目になってそのままえーんと泣き出してしまった。あまりのギャップに僕は目を丸くさせるだけだった。

「だつて・・・だつて、美咲が初めて男なんて連れてきたから・・・
・・・20年間手塩にかけて育ててきた娘をとられちゃうような気がしてー・・・」

このオヤジの正体はただの親バカらしい。僕は服の乱れを直してから、もう1度武藤さんに向き直る。しかし、美咲が待つてと手で制した。

「父さん、私孝介のこと好きだ。だから認めてほしい」

初めて好きだと言われて、僕は心臓が高鳴るのを感じた。反対に、

ますます泣き出す武藤さんは僕をきつとにらみながらも、渋々こくんとうなずいた。後になって思ったが、わざわざ僕が来て話をこじらすよりも手っ取り早く美咲が説明するほうが早かったのではないだろうか。

そのとき、僕の右側のふすまが勢いよく開けられた。

「お父さん！お風呂掃除してつて言ったじゃない！」

現れたのは、40代前半くらいの女性だった。別にそっくりなわけではなかったが、人目で美咲のお母さんだということに気づく。「待つて、お母さん！今からやるところなんだよ」

隣で慌てている武藤さん。どうやら典型的な力カア天下のようだった。なんとなく未来の自分を見ている気がした。僕の隣にいるのが美咲であつたらいいなと密かな願望を抱いたが、全く想像できなかった。

「あら、あなたが美咲の恋人君ね。いい男ねー。モテるでしょ？」

「あ・・いえ。はじめまして。葉山孝介です」

「私は美咲の母です。なにになに？2人はつきあってるの？」

僕は美咲を見た。ちょうど武藤さんも風呂掃除に行ってしまったので堂々と言つてもいいかもしれない。もし美咲のお母さんが暴力の人だつたら、僕の命はないかもしれないが。

「はい。おつきあいをさせてもらってます」

少し緊張しながら答える。どんな反応が返つてきても大丈夫、たぶん。

しかし、お母さんの反応は僕のどの予想とも違っていた。

「じゃー2人の愛が本物かどうか試してもいいかしら？」

試す？言っている意味がわからなくてきよんとした。美咲も小首を傾げている。

かこーんと鹿おどしの音が聞こえた。

「夏休みの間2人に同居生活をしてもらいます」

きっぱりと言い放つたお母さんの目は本気だった。そりゃあ、男としては女性と同居なんて夢みたいなお話だから嬉しい。美咲がぎゃ

「ぎゃー騒ぎながら抗議し、地獄耳の武藤さんが風呂掃除をほつぱりだして娘以上に文句を言っているのが見えたが、僕はうなずいて了解の意を伝えた。」

「予想もできない夏が始まるうとしてる。」

第5話 雷雨の夜に

「ただいまー」

最初にその言葉を言ってみたとき、一体どんな反応が返ってくるか興味津々だったが、相手は意外にもあっさりとしていた。

「ああ。おかえり」

夏休みを利用して始まった奇妙な同居生活。そのことを父と母に話すと、見合いがうまく進んだことを喜んでいた。いきなり息子の同居を聞かされた親の反応とは思えない。世の中本当にわからないことだらけだ。

わからないことと言えば、武藤ファミリーも謎だ。親バカな父親と同居を提案した母親、それから暴力女。1番常識があるのはおじいさんかもしれないと思う。同居生活を通して何かを試されるらしいが、毎日マツスルボディが自慢の人間に襲われることは覚悟していなければいけないかもしれない。

同居の舞台となったのは、美咲の家から少し離れた所にある一軒家を使わせてもらうことになった。正確には、おじいさんの趣味で建てられたアトリエらしい。アトリエといっても、キッチンもあるし、トイレもある。生活していくのに十分だった。

「あのさ、ご飯あるけど食べる？」

バイトから帰ってきた僕に、美咲は困ったように顔をしかめながら言う。失礼ながら一瞬何の冗談かと思った。

リビングのテーブルの上にはチャーハンとお吸い物とサラダが乗っていた。なんとなく感動を覚えたのも束の間、すぐに見たくもないものを発見した。

「えのきにしめじにしたいけ!!!キノコ入れるなよー!」

「うるさい!好き嫌い言わずに食べ!もし残したらー.....」

「わ、わかった。食べます!」

放っておいたら右ストレートでも飛んできそうだったので、慌て

てスプーンを手に取る。味はおいしかった。やっぱりキノコは好きになれないが、美咲の作る料理を僕はすぐに好きになった。見合いのときに、おじいさんが料理が得意と言ったこともあながちウソではないかもしれない。

結婚初夜のような緊張感はあったが、すぐに慣れた。美咲とこんな日常的なことをするなんて意外でおかしい。風呂に入っつて、テレビを見て、12時くらいにもう寝ようと思った。試しに、

「一緒に寝る？」

とニヤニヤしながら聞いてみると、美咲は顔を赤くして僕のみぞおちに蹴りを入れてきた。クリーンヒットだった。

一緒に暮らし始めてわかったことがある。

美咲は高校卒業後、企業に就職したが、上司のセクハラめいた口調に嫌気が差して辞めてしまったらしい。今はバイトを探している状態だから、本人曰くニート。これも本人が言っているのだが、普段は本性を出さずに行動しているらしい。僕と会ったときはちょうどその本性が出ているときだったから、今さら気を遣うこともないと言っていた。

そして、おそろしく照れ屋だった。僕が何気なく、

「美咲って学生時代はモテたんだろうね」

とつぶやくと、美咲はふるふると首を振った。

「今まで誰ともつきあったことないんだ」

へーと僕は思った。じゃあ僕が初めての恋人なんだ。なんとなく嬉しくなって顔がほころんだらしい。美咲がじつと僕の顔を覗き込んでくる。

「孝介は？まさか何人もの女を相手にしてきたわけじゃないだろうな？」

誰かときあつたことがないと言ったらウソになるので一瞬だけ言葉につまると、すぐに右ストレートが飛んでくる。僕はなんとかそれを避けた。

「こんのー・・・浮気者がー!!!」

「誤解だつて！全然つきあってないって！」

その日1日は口を利いてくれなかった。今まで2人の女の子とつきあったことがあるという事は伏せておくことにした。

しかし、怒つてもすぐに機嫌を直してくれることにも気づいた。

幸せだった。こんな幸せは今まで味わったことがない。

失礼な話だが、僕は今まで女性とのつきあいの中で、こんな幸せを味わうことなんてないと思っていた。僕は妙に気を遣うところがあつて、勝手に疲れてしまうのだ。そんなところがたぶん顔に出るんだ。いつも僕はフラれた。

美咲の場合、出会い方から異常だ。今さら気を遣えというほうが無理な話だ。

だから、同居をしてみても美咲の新たな一面が見えて楽しい。ずっとこのままでいたいとも思った。美咲と一生一緒にいたい。

美咲がどう思っているかはわからないが。

「風呂空いたぞー」

同居生活を始めて3週間がたったある日、風呂から出た僕はリビングにいる美咲にいつものように声をかけた。彼女はテレビをつけっぱなしにしながら、窓の外を興味深そうに見つめていた。外は雨。何が見えるのだろうか。

「孝介、光った。ほら」

外が一瞬白く光る。割とすぐにごろごろと雷鳴がする。雨はそんなにひどいようには思えないのだが、雷が鳴っているらしい。僕も美咲の後ろから外を見た。また光った。

今度はとても大きな音で雷が鳴る。

「ウチの妹なんか雷超苦手だぜ？今頃布団にくるまってるかも。美咲は怖くないんだ」

妹の姿が想像できておもしろい。

「私に怖いものなんてない」

そのときはそれもそうかも思ったが、怖いものがない人間なんていないのだ。それに気づいたのは、その日の夜のことだ。あの後すぐに寝ようとベッドに入ると、突然何の前触れもなしに部屋の扉が開いた。

驚いて飛び起きると、美咲が僕の腕をがしつと掴んできた。

「美咲・・・？どうしたんだよ」

月がないから、美咲がどんな顔をしているのかわからなかった。ただ、その様子が尋常ではないことはわかる。体が微妙に震えていることもわかった。

美咲はゆっくりと息を吐いてから、おそろしく低いトーンでつぶやいた。

「て・・・停電、したんだ」

「停電？」

僕は部屋を真っ暗にして寝るので気づかなかった。てっきり美咲も寝てしまったと思っていた。

「豆電球で寝るんだ・・・真っ暗は怖いから・・・」

あっさりと怖いものを言っている。さっきは怖いものなんてないと言っていたくせに、今はそんなことを考える余裕がないらしい。

試しに電気のスイッチを点けてみたが、電気が点く気配はなかった。なるほど、豆電球が消えたから、停電に気づいたのか。

僕は安心させるために、彼女の頭をぽんぽんとなでた。

「大丈夫。きつとすぐに点くよ。点くまでなんか喋ってよっか」

手探りでケータイを探したが、その手を急に掴まれた。驚いて美咲を見ると同時に、僕の頬に何かが当たった。それがキスだと気づくとき、美咲は泣いていた。顔はよく見えなかったが、確かに泣いていた。

「・・・なんで・・・泣いてんの？」

「泣いてない」

ぐすつと鼻水をすする音が聞こえた。僕らはどちらからともなく

互いにキスをした。まるで互いがそこにいることを確かめ合うような、そんなキス。

しばらくして明るくなった。思っていたよりも早く電気が点いたが、僕は停電していたことを忘れていた。美咲はどうなのかはわからない。涙の痕がすっかりとついていた。唇を離した。

「電気・・・復活したね」

「ん・・・」

美咲は目をこする。僕はリビングに行つて電気を点けてこようと思つたとき、美咲にまた腕を掴まれた。今度はまっすぐな意志を纏つた目で僕を見つめてくる。なんとなく不安な気持ちになった。

「孝介、前に言つたよね？俺を選べつて・・・ほんとは気づいてた。最初から選んでたと思う・・・お願いだよ、傍にいて」

外ではさーつと雨が降っている。雷はもう鳴っていない。

「電気は点けとく？」

僕は尋ねた。

「消して」

こんな気持ちは初めてだった。美咲が何を考えているのかわからなかったが、これだけははっきりとしていた。

これは美咲が望んだ結末だ。

翌日、はつとして目を覚ますと、隣に寝ているはずの美咲の姿がなかった。急に心細くなつて辺りを見渡す。昨夜、美咲がこの部屋に來た形跡が全くなかった。嫌な予感が頭によぎる。僕はジーパンだけ履いて部屋を飛び出した。

しかし、すぐに美咲は見つかった。

「おーおはよ・・・」

美咲はいつものように挨拶した後、僕の格好を見て固まった。心底嫌なものを見る目だった。

「服を着ろー！！！！」

フライ返しが飛んできたが、僕は紙一重で避けてそのまま美咲に抱きついた。普段の自分では想像できない行動だった。後ろから抱きつかれた美咲は成す術もなく止まっている。

「よかった・・・いなくなっただかと思っただ」

自分でもこんなに独占欲が強いななんて思わなかった。こんなに大切な人に会えるなんて思ってもみなかった。それは美咲も同じだと思っていた。

しかし、彼女は僕の腕を乱暴に振りほどいた。

「これ、弁当作つといたから昼に食べて」

「美咲？」

様子がおかしい。また昨日の不安感に襲われた。そういえばなぜ美咲は泣いていた？普段の美咲らしくない行動も昨日は見せた。暗闇が怖いのは本当だろうが、なんとなく違和感を感じた。

「お前・・・どうしたんだよ？」

「ごめん、な」

それだけ残して美咲は家を飛び出していった。慌てて追いかけたが、上半身に何も着ていないこの状態では外に出ることができない。頭の中が混乱していた。

「美咲ー！！」

彼女を呼ぶ声だけが8月の朝の空に響き渡った。

第6話 美咲が好きか？

美咲がいなくなった。

何度もケータイに電話したし、家にまで押しかけた。ケータイは電源が切られていた。家に行っても美咲は留守だと言われて追い返された。待たせてほしいと言っても聞き入れてはくれなかった。家の外で待ち伏せをしていたら、変質者だと勘違いされるからとやめさせられた。

メールも送ったが、返事はなかった。

そんなことをしているうちに学校が始まった。授業なんて聞いていなかった。ジヨーズの着信を聞いたかった。

サークルには顔を出さなかった。そうしたら、三田に無理やり連れてこられた。僕は徐々にサークル室に行った。

「葉山先輩！よかった・・・なんかあったんじゃないかって心配してたんですよ」

後輩の木下愛が出迎えてくれる。僕は曖昧に笑っただけだった。

「孝介、失恋したんだって」

三田は冗談のつもりで言ったらしいが、あながち間違っていないので心がずきんとした。すかさず、木下が驚いてみせる。どうやら冗談にのっているらしい。僕は何も答えられなかった。

そのうち、三田がサークル室から出て行った。

「先輩、ほんとに何かあったんですか？」

木下が僕の顔を心配そうに覗き込んでくる。彼女は昔から人の心に気づきやすかった。そして、僕は2年生のとき、そういうところが好きになって彼女とつきあった。もう別れてしまったが。

「先輩はいい人だから変な女に引っかけたかかってしまっんですよ」

「あー・・・うん。そうかもね・・・変な女だった」

美咲の姿が脳裏によみがえる。

「じゃあ、また私とつきあいますか？」

それが本心だということには気づいていた。木下はまだ僕のこと
が好きなんだ。それはわかっていた。僕たちは嫌いで別れたわけじ
やない。

「だけど、やっぱり僕は……」

週末、僕は愛知県に来ていた。電話で聞いた住所を頼りに目的地
に向かう。3時間かけてようやくその家を見つけた。

ピンポンとインターホンが鳴る。

「来ると思っていたよ」

美咲のおじいさんが出迎えてくれた。

通された部屋は見合いをやったのと同じような部屋だった。おじ
いさんは自分で淹れたお茶を出して持ってくる。ぺこりと頭を下げ
て、一口飲んだ。濃い目でとてもおいしかった。

「君がここに来るということはまだ美咲を見つけてないんだね」

全てお見通しのようだ。美咲のおじいさんとお父さんの会社は違
うのだ。僕は父におじいさんの会社名を教えてもらい、会社に電話
した。電話で、今現在名古屋にしていると知った。驚くべきことに、僕
は自分の名前を名乗ると住所を教えてくれた。どうやら最初から僕
が電話してくることを読んでいたらしい。

「あの……美咲さんの居場所、知ってるんですか？」

僕の期待は膨らんだ。しかし、おじいさんは首を振る。僕はしゅ
んとなった。

「美咲は君になんにも話してないんだね」

今気づいたが、おじいさんは眼鏡をかけていた。その向こうのま
つすくな瞳は美咲と似ているのかもしれない。僕はその目をじっと
見つめた。

「何をですか？何か僕に隠してることがあるんですか？」

この緊張感を止められなかった。真実が知りたくて、先へ先へと
促す。

「お茶はおいしいかい？」

「え・・・あ、おいしいです」

予想もしていなかった言葉に一瞬戸惑ってしまった。先へ促そうと思ったのに、空気がそれを止めているような気がした。僕は黙る。ずずつと茶をすする音が聞こえた。

「美咲が君と出会う前に、誰かと婚約していたことは知ってるね？」

「あ、はい・・・」

おじいさんは静かに語りだした。

「あの男は本当に最低だよ。最初は気づかなかったが、徐々に明らかになってきた。私もこんな婚約は美咲にとつてかわいそうだと思つた。そんなとき、私は美咲とコンビニに出かけて、チンピラに絡まれた」

話が一気に飛んだような気がしたが、僕は黙って相づちを打つ。

「美咲が庇ってくれたよ。奪われた私のかばんを取り返した。まあちよつとやんちゃだから、それだけじゃ済まなかったがね・・・そのときに出会つたのが君だ」

僕は息を飲んだ。それは忘れもしない美咲との出会い。後で考えてみても恐ろしい。

「君は初めて美咲の蹴りをくらわなかった人だ」

「はあ・・・」

どうコメントしていいかわからない。なんだか話がそれていないだろうか。なぜこんな思い出話をしているのだろう。とりあえずお茶を飲んで気持ち落ち着けた。今はいない美咲のことを思い出して胸が痛くなった。僕は彼女を泣かしたんだ。

「美咲はたぶん君のことを嫌うと同時に、自分でも気づかないうちに気になってしまったんだろう。明らかにいつもとは様子がおかしかったからね。傍にいて私はすぐにそれに気づいたよ。そこで失礼ながら、君を尾行した」

「はい？」

全く気づいていなかった。僕は自転車で逃げたはずだ。おじいさ

んはさらにその後を尾行してきたということか。この人、1番常識のある人だと思っていたが、1番の曲者かもしれない。

「それから、君のお父さんに掛け合って、お見合いを実行した。お父さんはいい人だね。事情を話すと、進んで協力してくださった」
出世のためじゃなかったのか。僕は物言いたげにソワソワしていた父の姿を思い出す。

おじいさんは息を長く吐く。それはため息ではなかった。

「見合いの席以降の美咲の行動は全てあの子自身の意思だよ。美咲は本当に君を愛していた。だから、いなくなっただんだ」

「なんで・・・ですか？」

僕には理解できない。好きなら、なぜいなくなるのだろうか。

「君は元婚約者を敵に回したんだよ」

そのとき、ようやく気づいた。そうだ・・・僕は美咲を婚約者から奪ったんだ。婚約者が黙っているわけがない。どくん、どくんと心臓が響きだした。

「婚約者は美咲を1ヶ月間自分の傍にいさせた。あの子が反抗しなかったのは脅されていたからだろう。そして、君と縁を切らせるために、しばらく美咲を解放した・・・もうわかるね？」

頭が真っ白になる。美咲は僕のためにいなくなった。あるとき泣いたのも、僕との別れを知っていたからだ。僕はそんなことにも気づかなかった。苦しんでいる美咲を救えなかった。彼女を苦しめていたのは僕だ・・・

「すまなかつたね・・・君には大変迷惑をかけた」

そのとき、おじいさんが深々と頭を下げた。僕は慌ててそれを制する。そんなことを望んでいたのではない。

「僕は、あなたに感謝してるんです。あなたのおかげで、僕は美咲と会えた。こんなに幸せなことはないです・・・本当に・・・」
奥歯を噛みしめた。そういしないと、自分が保てなかった。

「君は・・・美咲が好きか？」

おじいさんはゆっくりとした口調で尋ねてくる。僕に迷いはなか

った。

暴力女だし、怪力だし、めっちゃめっちゃだし、男勝りだ。その全てが僕の好きになった武藤美咲だった。僕はうなずく。

「本当に……本当に大好きなんです……」

「美咲の居場所は知らないが、ここに行けばわかるかもしれない」
お茶を飲み干したとき、おじいさんが電話の傍に置いてあったメモ帳とボールペンを使ってどこかの会社名と住所と名前を書いて渡してくれた。

「美咲がここへは来るなと言ったからね。もし来たら婚約者と結婚する、と言っていたよ」

僕はそのメモを大事にかばんの中にしまつ。これが美咲へと導いてくれる大事な道しるべだった。

「ありがとうございます。美咲は必ず僕が連れて帰ります」

「……頼んだよ」

どこまで僕を振り回せば気がすむのだろうか。美咲、君に言いたいことがたくさんあるんだ。全部言い切つてやる。覚悟しろよ。

僕は前へ歩き出した。

第7話 私を選べよ

目の前にそびえ立つホテル。たぶんこのスイートルームに美咲はいるのだろう。

僕はおじいさんからもらったメモで、美咲がいると思われるホテル名を知った。婚約者は岸本グループの1人息子、岸本徹しんおつだ。そのへんのことには詳しくないので、財閥名を言われてもさっぱりわからない。

ロビーで岸本グループについて聞こうと思ったが、やめておいた。変な考えが頭によぎったからだ。僕の姿を知られているかもしれないから、伊達眼鏡をかけて変装してきたが、いきなり岸本グループを聞く人間なんて怪しいかもしれない。

僕はエレベーターを使って最上階まで行ってみた。予想通りだった。ある部屋の前で、いかにもという風貌の男2人組みが立っているのだ。

1401号室。あの中に美咲がいるのかもしれない……しかし、どうやって中に入ったらいいのかわからなかった。懐から当然のように拳銃を取り出しそうなのあのボディガードに力で勝てるわけがない。あそこにいる確証だってない。

僕は一旦最上階から離れて1階まで降りた。歩きながら考えた。しかし、何も考えが浮かんでこなかった。

しばらくしてから声が聞こえた。

「また食べてなかったみたい。例のスイートルームの人」

「これで1週間よ。大丈夫かしら……」

それは、従業員入り口の開いたドアの向こうから聞こえてきた。そのときだった。僕の中で何かがひらめいたのは。

「それ、最上階の1401号室に運ぶ食事ですよ？先輩から頼まれて僕が持つていくことになりました」

ここまでの道のりには苦勞した。まずはボーイに成りすますための制服。新人と偽ってボーイの1人を捕まえて、新しい制服を得る。それから、何食わぬ顔で本来夕食を持つていく女性社員と交代する。一見簡単そうだが、僕にとってはライオンの檻に飛び込むようなものだった。

その女性は首を傾げて、じーつと僕を見る。なるべく顔を見られないように顔を背けたが、かえってそれも怪しい。意味もなくにこにこ笑っておいた。

「あなた・・・名札はないの・・・？」

「新人なんです」

「先輩って誰のこと？」

「ええつと・・・さっきロビーにいた人です。実はまだ名前を覚えてないんですよ・・・」

苦しい言い訳かもしれない。額に変な冷や汗を感じる。僕はなるべく早くこの場をやり過ぎたかった。

やがて、女性はうなずいて台車を僕のほうへ近づけた。

「それじゃあ、よろしくお願いします。私新人さんが入ってくるのと知らなかったのよ。ごめんなさい」

そりゃあそうだ。新人なんて僕のウソなんだから。僕は申し訳ない思いで台車を押していった。うまくいったことに安堵しつつ、美咲を見つけたら早めに退散したほうがいいなと思った。とにかくエレベーターで最上階を目指す。

例の部屋の前にはやはり男2人がいた。僕は顔を隠すように台車を押していく。前を通り過ぎようとしたとき、男の1人に話しかけられた。

「何の用だ」

「食事を届けに参りました・・・」

男の視線が痛かったが、なんとか平常心を保って答えることができた。しかし、なぜか男のほうが女性社員よりもあっさりとした。

「いいだろう」

女性社員だけでなく、男性社員も食事を届けに行くことがあるのだろう。僕はぺこりと頭を下げて部屋の呼び鈴を鳴らした。返事はなかった。隣でボディガードの1人がカードキーでオートロックを解除してくれた。

「失礼します」

僕は台車を押して入っていく。中にいるのが必ずしも美咲とは限らないが、それでもこの緊張感を抑えることができなかった。

部屋はこれまで映画でしか見たことがないようなものだった。こんな所に僕は一生だって泊まることはできないだろう。大きなテレビにソファ、大きなベッド。僕はベッドの上で足を抱えてうずくまっていた少女の姿を見た。一目でわかった。

「美咲」

とてもゆっくりとした動作で美咲は顔を上げる。焦点の定まらない目。しばらくぼんやりと虚空を見つめていたが、ようやく僕を見つけたらしい。急に驚いたように目を見開いた。困惑した表情のようにも見える。

僕は駆け寄った。ベッドから飛び降りた美咲を固く抱きしめた。

これはウソなんかじゃない。本物の美咲なんだ。やっと会えた・・・
「孝介・・・？なんで・・・」

美咲はどうして僕がここにいるのかわからないようだった。僕の背中に手を回すことなく、ただそこにじっとしていた。

「・・・あのとき、同居してた最後の朝、美咲が僕に弁当を作ってくれたから。弁当箱を返しに来たんだ」

もちろん、そんな理由ではない。しかし、美咲はそっかとうなずいて僕の背中に手を回した。ようやく美咲がそこにいることを確かめられた。それだけで僕は嬉しかった。

美咲は痩せたように思えた。肩が細くなった。それに顔もやつれている。なにより疲れたその顔が痛々しかった。

「俺と縁切りたかったんだろっけど、もつと強く言えばよかったのに・・・そうすればあきらめたかもしれない。こんなところまで追ってくるストーカー男になんかならなかったのに・・・」

「黙って出てこうとか、孝介なんて大嫌いって言うてこうとか考えてたんだけど・・・できなかった・・・できるわけないよ。迎えに来てくれるかなって、なんとなく期待してた・・・」

「悔しいけど・・・」

ぐすつと泣き出したのがわかった。僕はただ髪の毛をなでていた。

「美咲、とにかくご飯を食べよう？」

彼女はこくんとうなずいた。あまり長いと、外のボディーガードに目をつけられる。これからどうしようか？考えてみれば、この後のことを何も考えていなかった。

そのとき、美咲にボーイ服の裾を引つ張られた。驚いて見返すと、美咲は真剣な顔で見つめ返してくる。

「孝介、今から3つの選択肢を言うから選んで。1つ目、このまま私のことなんか忘れて前の彼女のところにでも戻る。2つ目、全ての元凶である私をぶっ飛ばして気分爽快。晴れて自由の身になる。それから3つ目・・・自分は損な性分だとあきらめて私と駆け落ち。岸本徹に真っ向から勝負を挑む。どうする？」

それはいつか僕が美咲に投げかけた問いに似ていた。

「私を選べよ、孝介」

迷わなかった。僕は美咲の手を取り、抱き寄せた。それが答えだった。

「後悔しないのか？」

「それはこっちのセリフだよ。っていうか、なんで駆け落ちなの？俺は今からでも勝負を挑めるよ？」

「駆け落ちが1番この人に迷惑がかからない方法なんだ」

そう言っつて、美咲は考えながらこれからのことを手短かに話した。僕もつなずきながら時々提案を入れて補足する。

部屋に入って5分。これでも長いほうだったが、なんとか怪しま

れずにすんだ。帰る直前、美咲は僕に言った。

「幸運を祈る」

「孝介もね」

今夜、それは実行される。

夜の7時頃、僕はホテルを見上げて立っていた。

このくらいになると、必ず岸本徹がホテルの部屋にやって来るらしい。美咲はその目の前で堂々と逃げ出してくるはずだ。そうすれば、ボディガードに責任がなくなる。美咲はそれで大丈夫なのかと聞いてみたら、

「平気だ。手荒なことなんてできるわけない」

と自信満々に言ってみせた。僕ができることは美咲のおじいさんの部下に借りた車を運転することだけ。逃亡にはおじいさんに協力してもらうことになっている。

「じいちゃんが関わってるって知ったらきつとあいつ思った行動をしない。だから、じいちゃんのことにはバレないように逃げるんだ。そしたら、きつとうまくいく」

岸本を知らない僕にはその言葉の意味がわからなかった。しかし、あのボディガードを抜けられるとは思えない。大丈夫なのだろうか・・・？

とにかく今は彼女を信じるだけだった。

と、思ったすぐ後のことだった。車に乗ってエンジンをかけたとき、急に外が騒がしくなった。驚いて、外の様子を見ると、いきなり助手席が開いた。そのすぐ後をボディガードと若い男が追ってきているのがわかった。

「出して！」

それは無我夢中だった。とにかく彼らを振り抜こうと、必死になってアクセルを踏んだ。

「どーゆー逃げ方してきたんだよ!？」

「強行突破。どうしよーもなかつたんだよ!！」

流れに身を任せて、とにかく僕らは2人で飛び出していった。

第8話 逃亡駆け落ち

僕たちの駆け落ちが始まった。

高速道路を走り始めて4時間。さすがに休憩をしたかったので、サービスイリアに立ち寄った。時刻は午前1時。普段ならもう眠くなるころだったが、状況が状況だけに全然眠くならなかった。助手席の美咲もずっと黙って前を見つめていた。

僕たちはほとんど無言だった。時々話すことといえば、眠い？とか疲れた？等の気遣いの言葉だけだ。

話を聞いてみると、美咲は1階のレストランから逃げてきたらしかった。

「寝てもいいよ」

僕は冷たいコーヒを飲みながら助手席の彼女に声をかける。少し休んだら落ち着いてきたのか、彼女はうとうととしていたのだ。

「平気。孝介こそ運転代わろうか？」

「ミツシヨン運転できるの？」

「・・・無理。私オートマ限定で免許取ったんだ」

小さく後悔している姿がかわいかった。僕は久しぶりに見る彼女をじっと見つめた。そういえば、今日はいろいろあつてまだ美咲の顔をじっくりと見ていない気がする。

そんな僕の視線に気づいたのか、美咲は少し頬を赤くして、それでも精一杯いつもの態度をとってくる。

「じろじろ見んなよ」

相変わらずの憎まれ口で苦笑した。僕はゆっくりと身を乗り出して、顔を近づけていく。美咲も少し身を乗り出してくれた。あと少しで唇が重なりそうになる・・・そのとき、僕は固いシートベルトをつけたままだったことに気づいた。

「あ・・・」

運転席に座ると、無意識にシートベルトをしてしまうのが僕のク

せだった。僕は苦笑いで美咲を向くと、彼女はさつきよりももっと顔を赤くしている。

「期待させちゃってごめん」

「してねーよ！バーカ！」

今度は飛んできた美咲の攻撃を受け止めて、そのままの動きで僕は彼女の唇を奪う。美咲は固まって動かなくなった。すぐに唇を離れた。

「続きは全部決着がついたらな」

「うるさい！コーヒー臭いんだよ！！」

美咲の元気が出たように思えて少しほっとした。僕は夜の高速道路へまた車を走らせた。

駆け落ち1日目の宿は車の中だった。と言っても、これから何日続くかわからないこの旅のほとんどが車の中の生活になるのだろう。僕も美咲も駆け落ちがすぐに終わってしまうことになんともなく気づいていた。逃げるなんてよくないとわかってはいるからだ。

僕は彼女に岸本徹について尋ねてみた。

岸本グループの御曹司で、弱冠25歳。親の経営する会社の部長をしているらしい。僕が一瞬見た印象だと、芸能人かと疑うくらいの容姿端麗な人だった。たぶんホテルの前まで美咲を追ってきたボディガードと一緒にいた若い男がそうなのだろう。

「でも、じいちゃんも言ってたけど、人間として最低だ。あんなヤツと結婚なんて死んでもごめん」

「世の中何でも金で解決できると思ってるのか？」

僕の持つ金持ち社会のイメージをそのまま伝えてみた。ひよっとしたら美咲とのお見合いもそんな意図があったのかもしれない。

そんなことを考えていると、美咲はふるふると首を振った。

「もっと根本的なところで。人間をゴミとかクズ同然のように思ってるのか？」

まだ関わったことのない僕にはその言葉の真意が読めない。

「大げさじゃない？」

「孝介も会ってみればわかる。たぶん私のことなんかゴミだけ利用価値があるとしたか考えてなかっただろうな。世間体気にする人間だったから、表沙汰にならないように必死で私のことを捜しているかもしれない」

どこか人事のように彼女は言う。僕自身も聞いてはいるのだが、なんだか眠くなってきた。座席を後ろに倒して眠ろうかと思ったとき、なんでもないことのようにつぶやいた美咲の言葉に、僕は眠気が吹っ飛んだ。

「もって半日だろうな。この駆け落ちも」

「へー半日………半日い!!!?」

確かに長くは続かないとは思っていたが、まさか今日明日で終わるなんて思ってもみなかった。次の言葉を探して口をぱくぱくとしていると、美咲は左手の人差し指と親指で持っている何かを示した。「これ、私につけられてた発信機だよ。元々私につけてたのか、逃亡のどさくさにまぎれてつけたのかは知らない。わかるのは、これで私たちの居場所は筒抜けだったことだ」

僕は頭からさーつと血の気が引いていくのを感じた。それなら、こんなところで休んでなんかいられない。エンジンをかけて車を発進させた。

「ごめん………こんなことに巻き込んだじゃって………」

彼女の口から聞く初めての謝罪かもしれない。さすがに意外だった。

「損な性分だとあきらめて駆け落ちしたんだ。後悔なんてしてないよ。それに………」

美咲をそんな最低男になんか渡したくない。

「それに……なんだよ？」

その先を聞こうと促されたが、僕は鼻歌を歌ってごまかした。そういうえば、本当に今さらだが、僕はまだ美咲に好きだと伝えていないことに気づいた。言おう。岸本徹とのかに決着がついたらちや

んと。僕は決心した。

高速道路を降りて、一般道路に出る。特に行き先を決めていたわけではないが、自然と賑やかな町とは反対の方向に向かっている。

美咲はこれ以上発信機が取りつけられていないか調べたが、なかったらしい。ついでに、つけられていた発信機もすでに手で壊してしまっている。それでもおおよその場所はわかってしまっただろう。っていうか、もうわかっている。

さつきから背後に無点灯の車がついてきているのだ。

「美咲、この逃亡駆け落ちもそろそろ終わりかもしれない」

「・・・半日ももたなかったな」

しかし、これが美咲の望んでいたことを僕は知っている。こんな山の中なら、誰にも迷惑をかけずに決着がつけられるからだ。電灯の下に車を停車させて、僕たちは自分から車を降りた。背後にいた車も停車したが、誰かが降りてくる気配はなかった。静けさの中、美咲が大きく息を吸って吐く音が聞こえた。

「その車に乗ってますよね？岸本さん」

少しの間。後方の車の後部座席が開いた。中から出てきたのは、ホテルで美咲を追いかけていた若い青年だ。たぶんこいつが岸本徹「気づかれていますか。逃げた貴女を捜すのは苦労しましたよ」第一声で変わった声だと思った。まるで変わらない笑顔に気味悪さも覚えた。

「発信機で私を尾行してたくせに」

「何のことですか。さあ帰りましょう。夜が明けてしまいます」

「来るな!!!」

一歩歩み寄った岸本に、美咲は大きな声で遮る。足を止めた岸本は少し驚いた顔をしていた。たぶん美咲の本性を見たのはこれが初めてなのだろう。張り付いた笑顔が急に引きつったものになる。

「私はこの人と結婚したい」

そう言って、美咲は僕の腕を取る。一瞬驚いた。結婚・・・？僕の

勝手な想像の中で、将来隣にいるのが美咲であつたらいいと思つたが、彼女自身からそんな言葉が出るとは思わなかつた。嬉しくなつたそのとき、ようやく僕は岸本と目が合った。まるで今初めて視界にでも入つたかのような顔だつた。

「人の婚約者に手を出すとは．．．あまりよい趣味とは思えませんね」

それは僕に向けられた言葉だつた。

「すみません。僕もよくないと思います。でも．．．．．もう戻れません。美咲が好きです。あなたは言えますか？胸を張つて美咲を好きだと言えますか？」

間があつた。それでも岸本は、
「言えます」

と答えた。その後、彼は何を思つたのか車の中にさつさと戻つてしまつた。その行動の意図が読めずにきよとんとしてそれを見てみると、突然彼らの車が急発進した。すぐに避けたが、僕が今さつきまでいたぎりぎりのところを車が通る。

「やめろっ！」

美咲の声にはつとした。見ると、助手席と後部座席に乗つたボディーガードらしき男たちが彼女を羽交い絞めにし、足を押さえて美咲を無理やり車に乗せようとしているのだ。

慌てて傍へ駆け寄ろうとしたが、すぐに美咲を乗せられてドアを閉められてしまう。

逃げられる．．．．僕は本能的にそう思つた。そんなことをさせてたまるか．．．！

それは本当に一瞬の出来事だつた。

僕は車に飛びついた。と、ボンネットの上に乗ると同時に車が乱暴にスタートした。振り落とされる前になんとか天井まで移動したが、車が急ブレーキをかけたので反動でそのまま前に飛ばされ、道路に押し付けられそうになる．．．．．そして、すぐに車がアクセルを踏むのがわかつた。

最後に見たものは道路の白線だった。僕は生まれて初めて車にひかれた。

第9話 プロポーズ

最初に言っておくが、僕のケガは右手首の骨折だけだ。

一口に骨折と言っても、この苦しみは本人にしかわからない。昔はなぜか骨折に憧れていたこともあったが、実際に骨折するとその不便さはたまったもんじゃない。特に利き腕だったから、余計に不便さは増すばかりだ。

でも、こんな腕でもやれることはある。僕は今日美咲に告白をする。

その前に、ここまでの経緯を簡単に説明しておこう。

車にひかれた後、僕は意識を失ったわけではなかった。確かに背中を打ったので、しばらく息が詰まってその場にうずくまっていたら、車から美咲が降りてきた。声を出さずにただうなっているだけの僕に、美咲は半泣きになりながら揺さぶってきた。

「孝介！やだ・・・しっかりしろ！」

「ん・・・だいじょーぶ」

なんとか体を起こすと、美咲がよかったと深く息をつくのがわかった。幸いどこからも血は出ていなかったが、体を支えている右腕が異様に痛かった。見ると、赤く腫れあがっているのがわかる。

「手・・・折れてんじゃないか？」

美咲が心配そうに手を触ろうとしたが、僕は腕をぶんぶんと振って大丈夫なことを伝えようとした。余計に痛くなっただけだったが、少し落ち着いてくると、僕は美咲の後ろに岸本徹の姿を見つけた。彼は表情こそなかったが、その顔が誰かに似ていると思った。この人は最低だと美咲もおじいさんも言っていた。僕も今まではそう思っていた。しかし、たった今のその表情を見て考え方が少し変わった。

「美咲、どうしてこの人と別れようと思ったの？」

堂々とそんなことを聞いたのは、美咲の反応と岸本の反応を見るためだった。案の定、2人は驚いたように固まってしまった。美咲は嫌そうな、そして岸本はまるで子供のように怒ったような顔になる。

「……キレるからだよ。自分の思い通りにならないと相手が誰だろうと暴力をふるう。逆らうと、もっと殴られるから……」

それは美咲にとって、とても辛い記憶であることがわかる。僕はそんな美咲を見ているのが辛かった。聞いてはいけないことを聞いてしまったと思った。

僕は岸本を通り越して、その後ろにいるボディーガードたちに話しかけた。

「あなたたちから見て、それは本当の話なんですか？」

挙動不審にソワソワとしている反応を見ただけで、それが日常茶飯事に行われていたことがわかる。

「違う!!」

不穏な空気を遮ったのは、他ならぬ岸本だった。今までの余裕のある態度はどこへ行ったのか、今はひどく焦っているように見える。「俺の言うことが絶対だ！俺は間違っていない！周りが俺についてこないだけじゃないか！」

その言葉を聞いて、ようやく岸本が誰かに似ていると思った理由がわかった。本人には言えないけれど、美咲に似ているのだ。性格ではない。時々垣間見せる人間らしい一面が妙に新鮮に思えるのだ。この人はただ子供っぽいところがあるだけなんだ。

「仕事を有利に進めるためにこの女との結婚を考えていたが、俺を理解しないヤツのほぅが最低じゃないか」

「はあ？あんたを理解なんてできるわけないだろ！」

美咲が怒り狂って叫ぶが、僕はそれを遮って岸本に言い放った。

「まあ、確かに美咲は凡人なので岸本さんの考え方にはついていけ

ないかもしれませんね」

美咲が僕をにらんでくるのがわかったが、構わず続ける。

「俺には美咲が必要なんです。だから・・・」

「そんな理解不能女、こつちから願ひ下げだ」

簡単に言えば、僕が岸本の心をあおった結果だった。それでも、本気でそう思っていたのか、あの後本当に婚約解消をしてくれて僕は堂々と美咲とつきあえるようになった。美咲にしてみれば、大嫌いな相手にあそこまで言われて面白くないようだが、もう一緒にいなくて済むのだからやっぱり嬉しそうだった。

ちなみに、この事件には裏がある。美咲のおじいさんだ。僕の事故のことで本来なら岸本は法的に何か言われるところなのだが、おじいさんはそれをネタに僕にも美咲にももう二度と関わらないと約束させたのだ。確かに、僕は岸本の車にひかれたが、あれは僕も悪い。それをこんな形で終わらせるなんておじいさんはある意味最強キャラなのかもしれない。

とにかく、もう気兼ねなしに美咲とつきあえる。それがすごく嬉しかった。

しかし、嬉しさのあまりデートの当日に寝坊してしまい、あわや30分も遅刻して待ち合わせ場所に向かった。

美咲は頼りなげにそこに立っていたが、僕を見つけると一瞬ほっとしたような顔になるとすぐに僕の股間に蹴りがクリーンヒットした。ひよっとしたら折れた右腕より痛いかもしれない。

「遅い!!!30分も私を待たせるなんて・・・!!ありえない・・・」

「ごめん・・・寝坊しちゃったんだよ」

「バカヤロー!!!」

今日のデートはただ紅葉を見に行くだけだった。しかし、たったそれだけのことが特別に思えて楽しい。まるで初めてのデートのよ

うなどきどき感があるようだ。

「ただ、今日の僕はズボンの左ポケットに入った大事なものをいつ美咲に渡そうかそればかりを考えていた。バイト代で買った指輪。美咲は受け取ってくれるだろうか。」

「孝介、こういうの好きか？」

お土産店で唐突にそんなことを聞かれた。美咲の手には、銀色の小さなアクセサリーのついている青色と水色の糸を編みこんだミサンのようなものが握られている。

「好きだよ。高校のときとかつけてたときあるし」

「じゃあ2つ買おつと」

すたすたとレジに行く美咲の後姿を見て、僕は彼女が何を言いたいかわからなかった。しばらくして戻ってくると、彼女は買ったミサンの片方を僕に差し出して言った。

「あげる。迷惑じゃなかったらつけてよ」

おそろい。その言葉が浮かんできた。ミサンガも嬉しかったが、おそろいのもを買いだす場所となった展望台の近くまで来ていた。

「ありがとう。大事にする」

おうつと美咲が精一杯平静を保とうとしている姿も見ていて面白かった。

夕方、僕はそれとなく美咲を海に見えるほうへ促すと、気がつけば僕と美咲がつきあいだす場所となった展望台の近くまで来ていた。ここは夜はもちろんそうだが、この時間でも人がいないらしい。僕にとってはチャンスだった。

しかし、潮風を肌を感じながらどう切り出そうかと考えていたとき、

「私、たぶん13だよ」

美咲にそんなことを言われてしまった。一瞬何の話かと思った。

美咲は僕のほうを見ることなく言い放つ。

「指輪の・・・サイズ」

「うっそ！？9号買ったよ！」

これで僕のサプライズ計画は終わってしまった。おろおろとして
いる僕に、美咲は苦笑している。情けない・・・理想のプロポーズ
じゃない・・・

「じーちゃんが今日のデートで指輪だって言うから試しに聞いてみ
た」

あのじーさん・・・最強のボスキャラかもしれない。

「あーあ・・・これじゃあ俺のプロポーズ大作戦が台無しだよ・
だけど・・・美咲、聞いてくれる？」

「聞く」

美咲はやっぱり海を見つめている。僕も同じように眺めて、息を
吸った。

「結婚してくださいーいー！！！」

僕の大声の告白は広大な海の前ではとても小さなものだった。こ
れが僕の精一杯だ。今さらながら、心臓がどくんどくと高鳴って
きた。

美咲も大声でイエスカノーで返事してくれると思ったのだが、僕
の考えとは裏腹に小さな声でぼそつとつぶやいた。

「私と孝介、お互いにどっちが好きになったほうが早いかって聞か
れたら絶対私だと思うよ。だからさー・・・」

美咲は大きく息を吸う。

「オッケー！！！」

彼女の告白の返事は海にも僕のもとへも大きく響いた。美咲が頬
を赤くして僕を見る。そんな彼女を僕は抱きしめた。今は左手でし
か彼女を抱きしめられないけれど、腕が治ったら彼女を両手で抱き
しめたい。僕は強くそう思った。

その日から美咲の左手の薬指で指輪が光るようになった。ちなみ
に、サイズはぴったりだった。

第10話 妊娠？

美咲が初めて大学に来たのは、大学祭の日だった。僕たちのクレイプ屋の出店にやって来たのだ。まさか来るなんて聞いていなかったから驚いてしまった。

「美咲・・・なんで！」

彼女は買ったクレープを頬張りながらなんでもないように答える。妹と遊びに来たんだ。来たと言って言ってたし」

美咲に妹がいるなんて初めて知った。見ると、美咲に隠れるようにして立っている女の子がいた。ぶっきらぼうに僕をにらんでくる。「じゃあ・・・行くわ」

立ち去ろうとする美咲と妹を、僕は慌てて呼び止める。

「また後で来なよ。サービスするからさ」

「うん」

2人が去った後、僕が振り返るともの珍しそうな目でサークルのみんなに見られた。さすがにぎよっとして固まってしまった。特に、三田の顔はにやにやとしつぱなしだ。なんとなく木下愛には申し訳なかったが、僕はこくんとうなずいておく。

「葉山先輩！知らなかったです！あんな美人な彼女がいたんですね！」

後輩の1人がそんなことを言ってきた。僕はあははと微妙な態度をとって肯定とも否定ともつかない返事をした。

「なーどこで出会ったの？あんなかわいい子」

「トンネル」

でケンカをしているところに出会った。まさかこんなふうに繋がられるはずがなかった。三田は僕の言葉が不思議だったようだが、
事実は事実だ。

しかし、これ以上冷やかされる前に退散しようかと思っていたときだった。さっきの美咲の妹が突然1人で戻ってきて、あるうこと

か僕の胸倉を掴んできた。とつさのことにすぐには反応できず、ただなぜこんなことになっていいのか考えていた。

美咲とは反対に髪の毛が短くて、ボーイッシュな女の子だった。

「お・・・お前とゆるヤツは・・・」

その子は僕を厳しい目でにらんでくる。

「えっ・・・なにに？」

「さっき美咲がトイレで吐いたんだよ。お前の・・・」

そこまで言いかけて、妹のケータイが鳴った。彼女はもう一度僕をにらみつけてからケータイをとって会話をしだした。やがて、驚いた声を出して一瞬だけ僕を見た後、すぐに駆け出してしまった。

後に残された僕はぼかんとしてしまったが、すぐに三田や他の男子学生たちにどこかに連れて行かれた。強引な力で、僕は成す術もなく出店の隅に追いやられる。

「バカヤロー！！！」

開口一番がそれだった。僕は目をぱちくりとさせる。

「いきなりなんだよ？俺、彼女のとこ行きたいんだけど・・・」

「孝介！単刀直入に聞く。彼女とやったのか？」

マジで単刀直入だなと思った。しかし、尋ねる三田も冗談で聞いているわけではなさそうだ。なんとなくいろいろなことを考えながら、うんと小さくうなずいておいた。

「それいつだよ？」

さすがに不躰な質問だと思う。

「なんでそんなこと聞くんだよ」

「いいから答えるよ。彼女妊娠したかもしんないんだぞ」

「え・・・？」

妊娠。その言葉がやけに大きく感じられた。何を言っているんだろう。妊娠というのはつまり赤ちゃんができるというわけで・・・将来的には自分の子供ができるものだと言ったと勝手に思い込んでいたが、こんなに早くお父さんになるなんて思っていなかった。

いや、まだそうと決まったわけではない。

「8月に・・・ちょっと一緒に暮らしてたときがあった・・・
そんなときに」

「あー・・・つわりにはちょうどいいじゃねえか」

三田のため息がやけに大きく聞こえた。つわり。さつき美咲の妹は美咲が吐いたと言っていた。まさか・・・まさか・・・

美咲を捜して大学内を駆けずり回ってから、ケータイで連絡をとったほうが早いということに気づいた。現在地を確認して、急いでそこへ向かう。

2号館の前のベンチ。そこに美咲は1人で座っていた。妹の姿がないのが気になったが、僕は美咲の隣に腰掛けた。

「いいのか？店抜けてきて」

「大丈夫。こつちのが大事」

美咲には意味がわかっていないと思う。さりげなく美咲のお腹を見ると、なんだか不思議な気分になった。もしかしたら彼女の中には、新しい生命がいるのかもしれない。僕と美咲の子供が・・・
「体、大丈夫？さつき妹さんに調子が悪いって聞いたけど・・・」
「美花に聞いたの？あー・・・聞いちゃったんだ、なんか恥ずかしいな」

妹さんは途中までしか言わなかったけれど、この美咲の言葉でもうわかってしまった。やけに照れくさそうにしている彼女の姿にどきんとしてしまう。っていうか、そんなことを思っている場合じゃない。もっとしっかりしなければ・・・

僕はこほんと咳払いをした。

「あの、今の俺には2人分養ってける金なんてないんだけど、卒業して俺が就職したら、絶対楽させる。もちろん俺も一緒に育児するだから・・・その、お腹の赤ちゃん、産んでほしいほしいんだ」

美咲はしばらく何も答えなかったが、やがて自然な動作で僕の左頬に手を伸ばして・・・思いつき頬を引っ張ってきた。あまりの痛さに目が潤んだ。

「いいいつ！何すん・・・」

「いや。なんかびっくりした。夢でも見てるんじゃないかと思って、だったら自分の頬をつねるのが普通だと心の中で反撃したが、痛み之余韻で声が出なかった。こんなに強く引つ張られたのは初めてだった。夢なんかじゃない。僕たちの子供がいるんだ。あと半年とちよつとで会えるんだ。それは不安なことでもあったが、同時に父親になるということが嬉しくもあった。

しかし、僕のそんな思いに反して、美咲はあっさりと言い放つ。

「残念だけど、子供はいないんだよ」

僕は耳を疑った。たぶん今僕はとてアホな表情をしているだろう。それくらい驚いてしまったのだ。

「美花に吐いたこと聞いたのかもしれないけど、それは胃腸風邪で、つわりとかじゃないから。ごめん・・・だけど」

急に現実を引き戻されたような気がして僕ははつとした。美咲の上目遣いに見る目を見て、なぜか恥ずかしくなってしまった。

「だけど、なぜだろう。少しだけ安心した。

「俺が早とちりしちゃったんだ。俺こそごめん。変なこと言っちゃって・・・」

「いや、嬉しかった・・・けど、言われなくても孝介の子なら産むっつーの」

「・・・俺の子じゃなかったら？」

試しに聞いてみると、美咲はむーっとして僕をにらんできた。嫌な予感がして逃げようかと思ったら、彼女はぼそつと言った。

「それはないよ」

そのとき、美咲が見せた微笑みが僕の中で印象に残った。

赤ちゃんは勘違いだったが、もう少し彼女と2人だけでいたかった。そして、少しずつ新たな命を守る力をつけよう。

美咲の妹が戻ってきたとき、僕は心の中でそう決心していた。

サークル室で今日の売上を数えていたときに、とりあえず僕はみ

んなに報告することにした。っていつか、最初に三田に伝えたら事を大きくされた。そりゃあそうかもしれない。なんせ僕は、

「結婚することにしたんだ」

と言ったからだ。三田の目がこれでもかというほど開かれた。

「できちゃった婚かよ!？」

「違う。子供は勘違いだったんだ。っていつか、元々前から結婚の約束はしてた」

周りのみんなが僕を見ていることがわかった。もうサークル室には来れないなど頭の片隅で思っていたら、なぜかやつほう!とお祝いをされた。ノリのいい連中である。その中で木下だけがうつむいていたので僕はなんだか申し訳ない思いになった。今度彼女と話し合おう。

三田を中心に5人もの男子が後ろから飛びついてきたので、物思いにふけていたことに気づく。

「葉山先輩!結婚の日取りとかはもう決めたんですか!？」

「どうやってプロポーズしたんですか!？」

「彼女の両親に挨拶に行くとかやっぱり殴られるのかよ!？」

矢継ぎ早に繰り返される質問に、僕は何1つ答えられなかった。

結婚の日取りはまだ未定、プロポーズの言葉は『結婚してください』、彼女の両親への挨拶は実はまだしていない。会いに行ったことはあるが、それは結婚の挨拶ではない。

僕は美咲との結婚のために、まだ何も行動していないことに気づいた。

その日、家に帰ってから、僕はリビングでパソコンを使っている父とテレビを見ている母と妹にそれとなく結婚のことを伝えてみた。案の定、父には泣いて喜ばれ、母にはにこやかに笑っておめでとうと言われ、妹の彩あやにはマジかよーと驚かれた。

「よくやったぞ!父さんはお前を息子に持てて幸せだ!!ぜひ今度連れてきなさい!」

父にぼかんぼかんと背中を叩かれながら、僕は今父が言った言葉を頭の中で反芻はんすうしていた。

そして、日曜日、僕は美咲を連れて来ることになる。

第11話 初めて彼女を家に呼ぶとき

日曜日の彼女の面持ちはとにかく緊張していた。いつものような暴行は一切なし。加えて、一生懸命美咲の思う女性らしい服装を意識してなのか、いつもははかないスカートを着ている。そんなに固く構えなくてもいいのと思う。

父にぜひ連れてきなさいと言われてすぐに電話してみると、美咲はなぜか敬語になって、

「行かせていただきます」

と言い出した。実際に日曜日に会ってみると、案の定かなり緊張しているようだった。どこで買ったのか紫色のひもがついた朱色のお守りを持っている。この光景を見ると、まさか今から彼氏の実家に向かおうとしている女には見えない。

「ここだよ」

自宅の前で一旦足を止める。振り返ると、美咲は一層緊張した面持ちになってお守りをポケットにしまった。

「そんなに緊張しなくてもいいよ。ウチの両親、けっこー気楽な人たちだから」

「だっ大丈夫・・・粗相そでまうのないように頑張る」

まるで敵陣にでも乗り込む前であるかのように気合を入れる美咲に、なんとなく苦笑して僕は玄関の扉を開けた。

「おかえりー」

最初に出迎えてくれたのは母だった。元々にこにことした顔だったが、今日はさらに笑顔で顔がくしゃつとしてしている。

「いいよ。あがんなよ」

僕がまだ玄関の前にいる美咲を促すと、恐る恐る彼女は入ってきた。そして、すぐに頭を下げて母に挨拶をする。

「はじめまして！武藤美咲です。あの・・・よろしくお願ひします

「！」
なぜか僕まで緊張してしまった。そういえば、こんなふうに女性を家に連れてくることは初めてだったなと今さらになって思った。

頭を下げられた母は、同じようにお辞儀をして、

「孝介の母です。いつも息子がお世話になってます。さあ遠慮せずにあがって。お昼ごはん作っておいたの」

「すみません……じゃあ邪魔します」

いつものぶつきらばうな口調はどこへ行ったのだろうか。新たな一面を見て面白いが、本人はきつとそれどころじゃないんだと思う。

僕たちはリビングへ向かった。

テレビをつけっぱなしにする意味があるのか、新聞を読みながら僕たちが来たことに気づかないフリをしている父はリビングのソファに背筋を伸ばして座っていた。僕が声をかけると、まるで初めていたことに気づいたかのように新聞をたたんでこちらを向いた。

「いや、どうも……こんなむさくるしい所ですがどうぞくつろいでください」

見合いの席で1度対面している父は自己紹介をしなかった。美咲もありがとうございますと言ったが、どうすればいいのかわからないうらしく、隣にいて焦っているのがわかった。確かに、くつろげと言われてもくつろげるはずがない。

「ここ座ってなよ」

近くのソファを見て言うと、美咲は少し迷ってからちよこんと座った。何度も言うが、普段とのギャップがあって面白い。

しばらく会話がないまま、母がキッチンからご飯を運んでくる。

美咲が慌てて手伝おうとするが、「お客さんなんだから」と言われて結局何もすることができなかった。しかし、「やっぱり手伝ってくれない？」とお願いされると、なんとなく嬉しそうに飛んでいった。

その間、父の顔は緩みつぱなしだった。なぜかすごく機嫌らしい。

昼ごはんはオムライスと野菜スープというシンプルなものだった。前に彼女に好きな食べ物を聞いたらオムライスと答えたので昼ごはんをそれにしたそうだ。美咲は嬉しそうに食べた。

「このオムライス、すごくおいしいです」

「よかった。お口にあって」

料理を褒められると、母はすごく上機嫌になる。

両親はどちらとも見合いの席で聞くような質問はしなかった。ただ単純に世間話をしたり、最近あった面白い出来事を話したりしていた。母がべらべらと喋りだすと、美咲もだんだんと緊張感が解けてきたらしい。自ら自分の話をするようになった。

「わーすごい！高校の空手で全国大会まで行ったなんて・・・うちの男どもに見習わせたいくらい」

僕と父はなぜか小さくなった。

「私も中学のときにソフトの試合で県大会で優勝したのよ」

「そうなんですか？私、ボールを飛ばす力がないのですごくいです！」

「そんなの慣れよ。現に娘も・・・あつ孝介の妹もちゃんとソフト続けられてるの」

「えっ！？妹さんいらしたんですか？」

「あれ、孝介言っただけだったの？彩って行ってね、今は部活に行ってるの」

エンドレスに繰り返される会話。よくもまあ会話がつきないものだと感じる。僕としては美咲が嬉しそうに話すその姿を見て安心したが、その分出る幕がなくなった父が小さくなっているのが哀れだった。

午後3時頃、母が夕方特売へ行くと言って、いつもは連れて行かない父と一緒に出かけteいった。

「じゃあね、孝介。くれぐれも手なんか出すんじゃないわよ」

「だーもーさつさと行けよ」

たぶん気を遣ってくれたのだろう。僕は半ば追い出すようにして2人を見送った。この後夕食を食べに行くことになっている。

「美咲ー・・・大丈夫か？」

しかし、僕の予想に反して美咲はさつきと何1つ変わらない顔でこくんとうなずいた。もっと疲れたような顔をしていると思った、と言ってみると、

「面白いじゃん、孝介のご両親。話してて緊張しなくなったよ」

けろりとして彼女はそう答える。そして、思いついたように、

「あ、そうだ。卒アルとか見たいな」

とりあえず、どこにしまったのかわからない卒業アルバムを探して10分たった。自分の部屋の様々なところを探ってみるが、なかなか見つからない。そして、15分後にようやく机の下から卒業アルバムを見つけ出すと、同時に美咲が部屋に覗きに来た。

「ごめん・・・やっと見つけた」

僕の手にはほこりをかぶった中学のアルバムが握られている。

「すげーほこり」

「俺は過去を振り返らない男なの」

率直な感想を言われて、なんとか切り返す。っていうか、ただ単純に忘れていただけだが。

美咲が興味深そうに、厚みのある表紙をめくっていく。僕も隣で懐かしい友人の写真を見ていく。ほとんどが中学で離れ離れになった人たちだが、みんな元気にやっているだろうか。

3年2組のページで美咲の手が止まった。僕のクラスだ。

「孝介、写真写りいいよな」

「そうか？普通だよ」

そんなことを言われたことがないので驚いた。個人写真は笑顔で写っているが、自分で見てもそんなふうには思えない。

「あ・・・この人」

美咲に言われて、またアルバムに目を落とす。彼女は個人写真のある女の人を見ていることがわかった。髪を2つに縛ったかわいい女の子で、僕もその子のことは覚えていた。

「牧原千絵ちえがどうかしたの？」

「・・・たぶん同じ高校だったと思う。覚えてる」

その言い方が気になった。

「牧原、なんかしたとか？」

「クラスの半分の男を自分に告白させたって聞いた」

なんだその話は。僕は改めてまじまじと牧原を見た。そういえば、中学生のときから男子にモテていたような気がする。しかし、僕も隣の席になってよく喋ったことがあるが、告白させるような考えの持ち主ではなかったかのように思える。

「まあ・・・牧原、かわいかったからなー」

僕としては牧原に対するフォロワーのつもりで言ったのだが、美咲にべしつと容赦なく背中を叩かれる。

「この中に元カノでもいるのか？」

「はあ？いないよ」

「どうだかねー・・・」

そう言っただけで彼女はぺらぺらとアルバムをめくって行く。僕は絶対に信じていないと思われるその横顔をじっと見てから、僕の視線に気づいた美咲と目が合った。僕はゆっくりとした動作で彼女と唇を合わせた。

そのまま美咲の体を寝かせた。普段の怪力はどこへ行ったのか、抵抗はしなかった。僕はその上に覆いかぶさるようにして、手をつく。

「怖い？」

美咲はしばらく黙っていた。それがなんとなく答えになっているような気がして、僕は体を起こして離れた。

「ごめん。怖がらせちゃったね」

「違っつー！」

すごい力で腕を引つ張られて顔を押し付けられた。美咲からの初めてのキスは頭突きされたように痛かった。反動で後頭部を壁にぶつけた。

「怖くないから、大丈夫だ」

「……うん。怖かったら言ってよ」

こくと美咲がうなずいたのを見てまたキスをする。そのまま時間があった。

1分後、玄関の扉が開く音で我に返った。美咲の首に顔をうずめていた僕は1つの可能性に思い当たった。

「孝介……？」

「妹だ！帰ってきた」

こうして僕と美咲の2人だけの時間があっけなく終わった。いいところだったのに……

「今日は楽しかった。みんなにお礼言っておいて」

外食の後、美咲を送っていく途中に、彼女はそんな感想を言った。

「そうか？うるさい連中だけだろ」

「今度はウチに来なよ。父さんたちもまた会いたいって言ってるし行くよ」

そのとき、美咲が嬉しそうな顔をしたのを僕は見逃さなかった。これを言うためにも緊張したらしい。なんとなく今日は緊張させっぱなしだなと思う。っていうか、今度は僕がそうなる番だ。またあの父親に何か言われるかもしれないと考えると恐ろしくなる。

そんなふうに僕が思っているときに、僕たちを見る変な視線があることに気づくのはもう少し先になる。

第12話 いきなり結納

とうとうこの日がやって来た。美咲が僕の家に来てからちょうど1週間後の日曜日、今度は僕が美咲の家に行く番だった。

先週の美咲の気持ちがわかる。前に来たときよりもっと緊張する。

なんせ今日は「お嬢さんと結婚させてください」と言うことになるのだから、一発二発は覚悟しなければならぬだろう。

「そんな緊張しなくたっていいよ。このまえとは違うんだから」
真面目な顔でそんなことを美咲に言われた。

「・・・美咲、すごく今さらだけど、なんで俺スーツなの？そりゃあ挨拶に行くんだからちゃんとした格好がいいのはわかるけど・・・」

事前に美咲に言われたのだ。日曜日はスーツで来たほうがいいのかもしいれないと。そのときは、やっぱり彼女の両親に結婚の許可をもらうためなんだからと納得したが、今日美咲に会ってみると、彼女は白いセーターにジーンズというあからさまな普段着だった。

「まあ備えあれば愁うれいなしってヤツ？ウチの父さん、明日から海外出張なんだ」

何の話だろうか。僕はこの後の自分の運命が恐ろしいものに思えてきた。

そして、美咲の家が見えてくる・・・

案内された部屋は前回とは違って、家の離れだった。そこはこの和風の家には似合わないような洋風な家具が詰め込まれた小さな家で、これはこれでなんだか落ち着かなかった。それにしてもどれだけ美咲の家は大きいのだろうか。

美咲に座るように言われたソファは僕の家のものよりずっと綺麗で豪華でふかふかだった。

「父さんまだ帰ってないみたい。もうちょっと待ってて」

そう言って美咲までもが部屋を出て行く。1人にしないでほしいと我ながら情けないことを思っていると、すぐに離れの扉が開いた。美咲が戻ってきたのかと期待したが、入ってきたのは彼女ではなかった。

「あ……君は……」

大学祭のときに見た、美咲の妹だ。ショートカットがよく似合う子で、確か美花という名前だっただろうか。

「あ……美咲の彼氏の……」

やや顔をしかめて記憶をたどっている美花に僕は笑顔で挨拶をした。

「葉山孝介です。よろしく」

「妹の美花です……っと、こないだはすいませんでした。勘違いで胸倉掴んじゃって」

「え？ああ！」

大学祭のときに、美咲が吐いたと言って掴みかかってきたときのことを思い出す。

美花は言いにくそうに目をそらして言葉を探していた。

「美咲を心配してやったことなんですよ？気にしてないよ」

美花のしゅんとした態度を見ると、なんだか微笑ましくなる。そういうところが姉に似ているかもしれない。なぜか美花はダツシユで逃げていったが、またすぐに扉が開いて、今度は忘れていた分余計に緊張してしまった。

美咲の父親の登場だ。

会社帰りなのか、スーツ姿でお父さんは現れた。この姿を見ている限り、典型的なカカア天下の家族には見えなかった。むしろ亭主関白に見える。

と、美咲がその後ろからなぜかお嬢様のような服に着替えているのが気になった。

「さて、今日は何の用ですか？」

ソファにどつしりと構える美咲のお父さんはやっぱり威厳たっぷりだった。僕はごくりと唾を飲んでから、1度隣に座る彼女の顔を見た。神妙な顔でうなずくのを見て僕の中で覚悟が決まった。

「今日は頼みたいことがあって来ました……お願いします！美咲さんと結婚させてください！」

ばきつと何かが壊れるような折れるような音がしたが、僕は構わず頭を下げ続けていた。しばらく反応がなかった。まだ言葉が足りなかったんだと思って慌てた。

「一生大事にします！絶対幸せにします！だから……僕たちの結婚を認めてほしいんです！」

僕の決死の告白もむなしく、やっぱり返事はなかった。しかし、おそろおそろ顔を上げて上目遣いにお父さんを見ると、なんとほろりと一筋の涙を流していたのだ。さすがに驚いて目を見張ってしまった。

情けないにもほどがあるが、僕はおろおろとして美咲を見た。すると、彼女も予想外の反応をして僕を見ていた。目が合うと、露骨に目をそらされる。顔を赤くしてずっと見られていたらしい。今はもうツンとした態度がツンデレに拍車をかけている。

「とうとうこの日が来るとはな……いや、美咲に会ってほしい人がいると言われたときからこうなることはわかっていたんだ」

ひとり言をつぶやいてから、お父さんは僕に向き直った。

「寂しいが、美咲をよろしくお願いします。君なら娘を幸せにしてくれると信じてるよ」

目の前が開けたような気がした。僕は初めて彼女のお父さんに認められた。たったそれだけのことがこんなに嬉しいことだったなんて知らなかった。

ちなみに、さっきの折れた音は、お父さんが握っていたシャープペンシルを折った音だと後で知った。

そして、僕は今美咲の家で、美咲と美花、2人のお父さん、お母

さん、おじいさん、なぜか僕の父と母と妹の彩と一緒に食卓を囲んでいる。

美咲のお母さんの話によると、「旦那が海外出張に行く前に、結納だけでも終わらせておきたいの」ということだった。結納といっても、形式にこだわらない両家がただ単純に一緒に食事をするというだけのものだった。

「この度は、ご結婚おめでとunggございます」

そんなことを誰かに言われてしまって、僕も美咲も焦ってしまった。乾杯で合わせたシャンパングラスを手持ち無沙汰にゆらゆらと揺らす。

「孝介、一言挨拶したらどうだ？」

父の言葉で、僕はおずおずと口を開いた。

「えっと・・・今日は僕たちのために集まっていたいただきありがとうございます。今日を持ちまして、僕と美咲は正式に婚約することができました。思えば、ここまでの時間はすごく短かったようで、中身の濃い時間を過ごさせていただいたと思います。僕は今幸せです」

一息つくくと、今度は美咲のお母さんが美咲に何か話すように促している。彼女は照れくさそうな顔をしたが、みんなに注目されたので、ようやく話し始めた。

「私もすごくすごく幸せです。好きな人と婚約できたこの日を私は一生忘れません」

そこまで言うと、美咲のお父さんがわあっと泣き出した。この様子では結婚式の当日には大泣きするんだろうなと思う。なだめる美咲の姿を見て、僕は結婚式当日のことを考えた。お父さんには申し訳ないが、早くその日が来てほしい。美咲のような人にはもう二度と会えないと思うからだ。

「それで、結婚式はいつくらいにするつもりなの？」

母の素朴な質問だった。

「まだ決めてないんだ」

「春くらいにはしたいな」

美咲の意見を聞くのは初めてだった。なんとなくどきんと心臓が高鳴った。

「そうね。春なら服合わせやすいけど、今から式場の予約が取れるかしら」

と美咲の母。

「大丈夫でしょう。今ならまだいい日が取れるでしょ」と僕の母。

こういうときに会話が弾むのは母親なんだと僕は気づいた。

この日の結納を持って、僕たちは正式に婚約することができた。

それから、式場の予約をしてみた結果、僕たちの結婚の日取りが決まった。

4月24日。美咲と会ってからちょうど1年目の日だった。

「指輪っておそろいだよね？」

美咲に聞かれたとき、僕はきよんとしてしまった。僕の左手薬指にも輝いている指輪は美咲に贈ったものと同じものだった。それから、ミサングもおそろいだ。

「そっだよ」

「そっか」

何が聞きたかったのかはわからない。ただ、そのとき嬉しそうな横顔を見ただけで、僕は満足した。その表情はすぐにいつものなんだよ顔になったが、そういう感情の変化を見ているのは面白いなと改めて実感した。同時に人間臭さに苦笑する。

この人と一生一緒にいたい。

第13話 懐かしの再会

式場のパンフレットを手に大学のトイレで悩む学生なんてそういうもんじゃない。しかし、周囲に何を思われても構わない。ここが一番静かで誰にも邪魔されなくて済むんだ、と言い訳しながら僕は個室をまるまる1時間占領していた。

週末に美咲と一緒に式場に行ってみて、衣装合わせをすることになっっている。そのときに、簡単な打ち合わせもすることになるだろう。

「すいませーん。入りたいんですけど、まだですかー？」

変な妄想に浸っていた僕は慌てて我に返る。ドアがノックされたのだ。個室が全部埋まったんだと初めて気づき、パンフレットとバッグを持ってドアを引く。最初に見えたのはノックした人物と思われる人の足だった。なぜか僕は違和感を感じた。

「すみません。ちょっと考え事をしてたんで……」

言った瞬間、僕は固まってしまった。同時にさっき感じた違和感の正体にも気づく。

「いーえ！全然気にしてませんから」

相手は屈託のない笑みを浮かべて、そのまま個室に入ろうとする。視界の片隅にどの個室も空いているのが見えたが、問題はそこじゃない。

「あの……ここ、男子トイレですよ……？」

「知ってるよ。入口に男子のマークがついてたもん」

だったらなぜ女性が入ってくるのだろうか。今どきの大学生らしいパーマをかけた人で、服装も白のセーターに黒と白のチェックのスカート。ストッキングにブーツ。ぶっちゃんけて言えば、とてもかわいい女の子だったが、最近は何でも女装をすればかわいくなる時代である。

余計なことを言わずにその場を立ち去ろうとしたときだ。なぜか

手を握られてしまつてぎよつとした。

「あいかわらずだね、孝介君」

「へっ？なんで俺の名前……」

じつくり見てもやつぱり見覚えがない。こんなにかわいい男の友達なんていないはずだ。

「覚えてないの？私だよ。中学のとき一緒だった牧原千絵」

その名前に聞き覚えがある。牧原……中学3年間同じクラスで隣の席になったこともあるから、よく覚えている。そういえば、かわいくて男子に人気があつたな、よく見れば牧原じゃん、などと寝ぼけたことを考えながら僕ははたと止まつた。

「ここ……男子トイレだぞ……！」

僕の声がやたら大きく響き渡つた。

「まさか同じ大学だつたとはな……」

学食で少し早めの昼食をとりながら、僕はまじまじと牧原を観察していた。

「私も気づいたの最近だよ。孝介君、英米学部でしょ？私文学部だもん。学部違つとほんつと関わり合いにならないんだね」

牧原はすでに食べ終わった持参の弁当を片付けている。

久しぶりに会つてみると、時の流れとは恐ろしい。中学のときも十分かわいかつたが、今はかわいさに加えて品みたいなものを纏まとっているような気がする。要するに、綺麗だと言いたいのだ。

「でも、久しぶりに会つてみると、あの頃に戻つたみたいだね。そうだ、覚えてる？中3のときの骨夫事件。保健室にあつた頭蓋骨ほねおの通称骨夫が突然いなくなつたと思つたら、次の日ウチのクラスの教壇の上にいたつてヤツ」

「覚えてる、覚えてる。あれつて結局誰がやつたんだつてことでモメて、その日の午後の授業が全部潰れたんだよな」

思い出話に花が咲き、僕たちは長いことぺちやくちやと喋つていた。元々、牧原が聞き上手、話し上手だつたのかもしれない。次々

と思い出される出来事に、僕の心はわくわくしていた。

「そういえば、すごい長い時間トイレにこもってたよね。出てくるの待ってたんだけど、全然戻ってこないからさー、思い切って入っちゃった。あんまり長いこと座っていると痔になるよ」

それが男子トイレに入ってきた理由らしい。牧原はきよんとしたような顔で覗き込んでくる。

「トイレが1番静かなんだ。教室とかサークル室だと周りがうるさくて」

僕は苦笑してイスの背もたれにもたれる。

「・・・？もしかして勉強？」

「ううん・・・俺さ、もうすぐ結婚するんだ。そのための準備っていうか」

なぜかこれを言うのにすごく緊張してしまった。でも、牧原ならきつとおめでとうと言ってくれるだろうと信じて疑っていなかった。中学のときの彼女はそうだったから。その前にびっくりされる可能性のほうが高いことにも僕は気づいた。

しかし、牧原の反応はなんとなく違っていた。

「結婚って・・・孝介君が？」

「え、そうだよ」

周囲の温度が下がったように思えたのは僕の気のせいだろうか。

「そっか・・・そうなんだ！おめでとう！！このく、私よりも先に幸せになりやがってー・・・」

その後の牧原はなぜかさっきまでとは違った。急に寡黙かまくになったと思ったら、すぐに授業があるからと言って学食を後にしようと言い出した。何か悪いことでも言ったかなと思いつつ、僕も席をたつて途中まで彼女と一緒に歩く。サークル室に行こうかなとも考えたが、なんとなく気が進まなかった。木下と話さなければならぬのに。

「ねえ、孝介君」

学食の階段を下りたところで、牧原に話しかけられる。

「彼女とはいつ出会ったの？」

「今年の春に初めて会った。初めは嫌いだったんだけどな」

奇声をあげて追いかけてくる美咲の姿を思い出した。今思い出しでも怖い。でも、今ならいい思い出だ。

「……いつから彼女のこと好きになったの？」

牧原は笑顔で尋ねてくる。さっきの少し変わってしまった態度は気のせいだったらしい。

「いつだろう……？わかんない。気がついたら、好きだった。あ、でもさ、よく言うじゃん。この人と結婚したいって思う直感が男にはあんまりないって。俺も前まではそう思ってたんだけど、彼女と一緒にいるうちにその直感感じたんだ」

いししと笑って、僕は左手の指輪を見せる。彼女は今初めて気づいたらしく、少し驚いた顔を見せたが、すぐににこっと笑ってじゃあねっと駆け出していった。

そのとき、僕は気づいていなかった。今日の僕の言動がどれだけ牧原を傷つけていたかということ……

日曜日、式場での簡単な打ち合わせの後、僕と美咲の衣装合わせを行った。僕のほうはともあつさりと終了したのに対し、美咲のほうは時間がかかっているようだ。退屈しのぎに衣装のパンフレットをめくりながら、頭の片隅では美咲がどんなふうになるのか楽しみでいた。

ふと、何かを感じて顔を上げる。何かってなんだろうと自問すると、

「孝介」

名前を呼ばれて、僕は何気なく振り返る。そのまま、口を開けたまま動けなくなってしまった。

不意打ちだ。真っ白なウェディングドレスを着た美咲が立っていたのだ。予想外に似合すぎていて。黒髪も白いドレスに映えてすごく綺麗だった。こんな人と僕は結婚していいのかと本気で疑って

いるうちに、知らずに頬が紅潮してしまっただらう。

「どうかな・・・馬子にも衣装じゃないか？」

「・・・綺麗だよ。すごく綺麗だ、美咲」

すると、美咲が照れたように顔を背ける。面と向かって褒められたことはないのか、どうにも慣れていないようである。

「これにしようか！」

「でも・・・ちよつとレンタルするには高いよ」

「大丈夫。っていうか、俺がこれ気に入った」

お金のほうならたぶん大丈夫だ。僕は昔祖父に連れられてよく競馬に行ったことがあるのだ。そのお金が実はこっそりまだ使ったことのない通帳に入っていた。額にして、200万くらい。競馬の力はすごいが、なんとなく美咲には黙っておくことにした。

と、そのとき、美咲がふと顔を上げて周囲を見渡し始めた。

「どうしたの？」

不思議に思つて尋ねると、彼女は顔をしかめたまま答えた。

「最近、誰かに見られてる気がするんだ」

僕も辺りを見渡したが、式場の従業員がいる他は特に変わった様子はない。

「ごめん、気のせいみたいだな」

そう言つて美咲は納得したようだが、僕の中でこのとき嫌な予感が渦巻いていた。僕は自分がさつき何かを感じたことを思い出す。あれはひよつとしたら気のせいではなかったのかもしれない。もしかして、美咲を狙うストーカーの可能性もありうる。

最初に事が起きたのは、クリスマスの日だった。

第14話 酔った勢いで

独身最後のクリスマス。どうやって過ごそうか。

『今年のクリスマスはホワイトクリスマスになりそうです。一段と冷え込むと思われまますので、みなさん温かくして出かけてください
ね』

お天気お姉さんの言葉に僕はうなずいて僕は家を出た。

「美咲、クリスマスどつか出かけないか？」

彼女の家にあがらせてもらい、初めて部屋に入れてもらった日のことだった。24日は授業日だったが、25日は休みだ。

「いいけど・・・24はダメ。家でクリスマスするから」

けるりと言う美咲がかわいい。たぶん家族でクリスマスを過ごすんだなと頭の中で考えながら、

「オツケー。じゃあ25日はデートしませんか？」

「・・・どうしてもしたいんなら、してやってもいいけど」

見栄を張ったわけではなく、本気での照れ隠しなんだろう。僕は苦笑して部屋の中を見渡してみた。僕の部屋よりずっと物が少なく、その分すっきりと片付いた部屋だった。なんとなく視線がベッドに行く点で、やっぱり自分は変態なんだと思う。

「どこか行きたいところある？」

「ある！」

急に目を輝かせて彼女は身を乗り出してきた。

「駅前にでっかいツリーがあるってテレビで見たんだ。一緒に見に行か・・・見に行つてやってもいいんだけど・・・」

はしゃいでいた自分に気づいて慌てて冷静さを取り戻したらしいが、もう遅い。僕は爆笑してしまった。クッションやら枕やらが飛んできてぼすぼすと当たったので仕返しをしながらも笑いは止まらなかった。

「どうしても見に行きたいってんなら、付き合っただけでもいいんだけど？」

「もーいいよ！来んなー！！」

「ジョーダンだって。見に行こう、2人で」

そう言っただけで、美咲に後ろから手を回して抱きつく……ように見せかけてプロレスの技をかけようとした。しかし、すぐに腕を掴まれて、僕はそのまま柔道の技で投げ飛ばされてしまった。美咲と出会ってから、初めて受身の取り方を知った。

あいかわらずの怪力で、男の僕も簡単に投げる。じゃあ、女だったらもつと簡単だろって聞いてみたら、女は投げたことがないと答えられた。聞くところによると、今まで投げてきた数多くの男の誰にも力では対等に接することができたそうだった。

「孝介にも絶対負けないからな」

「へーそう……じゃあ」

ニヤリとニヒルな笑顔を浮かべて、僕は強引に美咲にキスをした。勢いで床に倒れこんだが、構わず角度を変えて何度も唇を吸う。今まで抵抗しようとしていた彼女の腕の力が急にすんとなくなるのを確認して、僕は顔を離す。鼻の頭が触れるぎりぎりの位置だった。

「俺の勝ち」

言っただけで、彼女は真っ赤になって、あろうことか男の急所を蹴り上げてきた。あまりの痛さにしばらく息が詰まる。なぜか片目だけうるうると目が潤んでしまった。

「私の勝ちだ」

情けないその格好で、僕は自分の負けを認めた。

そして、12月24日。雲行きは怪しいが、雪はまだ降りそうもなかった。僕はどんより曇った空を見上げて足早に歩こうとする。ファアのついたもここのジャンパーを着ていても寒いものは寒い。大の男がポケットに手をつ突っ込んで背中を丸めて歩く姿は見た目にもかっこわるいが、寒いんだから仕方ないと言い訳をする。

大学内でクリスマスを感じたのは食堂だけだった。かかっていたBGMがクリスマスソングになっていた。個人的には『サンタが町にやってくる』が好きだった。座る席を探しながら、頭の中で歌を口ずさんでいると、

「孝介君！」

その声に呼び止められて、僕は振り返った。ちょうど食べ終わったらしい牧原は弁当袋を持って近寄ってくる。

「1人なの？」

「そう。みんなクリスマスに学校なんか来るかって言ってサボり」

「それわかるな」。私、今日はもう終わりなんだ。一緒にいてもいい？」

牧原は苦笑して同感する。

「もちろんオツケー」

僕たちは空いていた4人がけのテーブルに座る。向かい側に牧原が座ったのを見て、僕はふと思った。

「そうだ、牧原は中学卒業してから彼氏とかできた？」

美咲の言葉を思い出したのだ。確か、クラスの半数に告白させたのかなんとか。てつきり男キラーにでもなったのかと思っていたが、久しぶりに再会してみてもそんな雰囲気は感じられない。

当の牧原は困ったように笑ってから、小さくこくんとうなずいてみせた。

「一応ね。でも長続きたかったの。私があぶん本気じゃなかったんだと思う」

「ふーん・・・そっか。牧原、すごく人気あったもんな。中学のときとか、男子みんな憧れてたんだよ」

僕はまた中学のことを思い出していた。

「じゃあ孝介君は？」

「俺もその1人」

でも、牧原は人気がありすぎて僕には手の届かない存在だったので、特別な感情を抱いたことはなかった。

「ねえ、今日は彼女と一緒にどっか出かけたらしらないの？」

きよとんとして尋ねられたので、僕は首を振る。

「用事があるって。だから、明日出かけることにしました」

「それならちよつと付き合ってほしい所があるんだけどいい？すぐに終わるからさ」

僕は少しだけ迷った。何に対して迷ったのかはわからないが、なんとなくダメなような気がしたのだ。

「はい！決定！行こう行こう！」

僕の意味とは関係なく、牧原は半ば強引に僕をどこかへと連れて行く。もしこのとき無理にでも断っておけば、あんなややこしいことにはならなかったのになと後からになって思った。

牧原が連れてきた所は駅前にある小さなイタリア料理店だった。

入ってみると、中はサラダバーがあり、どうやら昼だけのバイキングになっているらしかった。まだ2時前だったので、店はお客さんでいっぱい、やっぱりカップルが多かった。

今お昼を食べたばかりで正直何も腹に入らないなと思っていると、牧原は店のテーブルに座ろうとはせず、厨房近くにいたウェ이터に何かを話していた。しばらくして、ウェ이터がどこかに案内しようとする。

「ほら、孝介君こっち」

わけがわからず、僕はとりあえずついていく。

「ここ会員専用の部屋があるんだ。今日みたいに混んでる日は会員だとすぐに座れるの」

ウェ이터が開ける扉の向こうには確かにもう1つの世界が広がっていた。

「お待ちせいたしました」

ウェ이터が持ってきたのはビールジョッキだった。別に僕が頼んだわけではなく、牧原が勝手に注文したのだ。

「牧原……あのさ……」

「いいから。今日は私のおごりなんだから」

返す言葉がなくなってしまう、僕は仕方なく目の前のジョッキを手取る。なんだかビールというよりもっときついお酒のような味がしたが、それでもものに流し込んでいく。牧原は牧原で飲んでいるのはオレンジジュースだった。

その後、彼女の高校生活や僕の結婚の話になって盛り上がってしまった。すぐに帰ろうとしたのになぜか6時を過ぎた。

僕はかなり酔ってしまった。

何かの振動で目が覚めた。尻に響く振動。ああ、ケータイがポケットに入ってるのかと寝ぼけた頭で考えながらも、今の僕には電話に出るといふ行動に結びつかない。それでも止まらない振動にうるさいなと思い始めてきた。僕はゆっくりと目を開ける。

知らない天井。あれ？どこだ、ここ。

いつにも増してのろい動作で起き上がると、羽毛布団が体から落ちた。そして、僕は固まってしまった。上半身裸なのだ。

え……え？慌てて自分の足を見たが、ズボンはいっていた。ただし、ボタンははずされ、チャックが全開だったが。

頭が混乱してきた。っていうか、頭ががんがんする。そうだ、昨日は牧原と店で飲んで、それから帰るかっつて話になって……僕が酔ってるからっつて言っつて、牧原が下宿先に案内してくれて……それから……それから？

と、隣で何かが動いた。僕はびくつとしてそちらを向く。誰かが……女の人が……牧原が起き上がった。

まさか……この状況は……ドラマでよくある光景。

「ま、きはら……？え、ここどこ」

「私の部屋だよ」

あっさりと答える牧原。よく見ると、彼女はキャミソールで下は下着だけだった。目線に困っつて慌てて目をそらす。頭がぐわんぐわ

んしてきた。

酔った勢い。僕の頭の中にそんな言葉が浮かんでくる。最低だ。そのとき、またケータイが鳴り出した。正確にはマナーモードになっているらしい。混乱しきった頭で、特に相手の名前を見ることなく電話に出た。

「もしもし・・・」

「孝介？あのさ、今日のことなんだけど・・・」

美咲だ。僕は急に現実に引き戻された気がした。何か言わないと焦っていると、僕の手からケータイが奪われた。

「孝介君は今忙しいので今日はデートできません」

牧原はそれだけ言うとおびつとケータイを切った。僕はただそれを呆然として見てるだけだった。

「牧原・・・俺昨日・・・何にもしなかった、よな？」

「好き」

僕の質問には答えずに牧原は僕に顔を近づけて・・・そしてキスをした。

第15話 好きだ

「・・・牧原！何してんだよっ！寝ぼけてんなって！」

突然唇を重ねられた僕は一瞬何が起こったのかわからなかったが、慌てて牧原の体を押しつけた。今起こったことが信じられなかった。

牧原はしばらく僕を見た後、すぐにふいっとそっぽを向いてしまった。

「寝ぼけてない。寝ぼけてんのはどっちよ？ずっと・・・中学のときからずっと好きだったのに・・・気づかなかったのは孝介君じゃない！」

その泣きながら話す彼女の様子を見て、僕はまた信じられなくなってしまうた。だって、牧原は本当にモテモテだったからだ。隣の席になった僕を羨ましがった男子軍団が何人いるのか数え切れないほどだ。

彼女の気持ちは嬉しい。だけど、僕はその気持ちには答えられなかった。

「ごめん・・・好きな人がいるんだ。その人のことしか考えられない」

「・・・武藤美咲ちゃんでしょ？」

「え？なんで知ってんの？」

言ってから同じ高校だって美咲が言っていたことを思い出す。それでも、僕は美咲の名前を牧原の前で言った覚えはない。

「最初は知らなかった。っていうか、美咲ちゃんが6月くらいにこの大学に来たのを偶然見たの」

ひよっとしたら美咲からまるまる1ヶ月間連絡がなかったあのときのこともかもしれない。彼女はその後大学に来たのだ。

「美咲ちゃんなんて上級生殴って謹慎処分になってくせに、ちょっとかわいいからって男子にすぐモテたのがムカつく。それを本人何にもわかってなくて気づいてなかったのもムカつく。でも1番

ムカツクのは・・・私がずっと好きだった孝介君と結婚しようとしてること。孝介君と同じサークルの人に聞いたよ」

美咲が感じていた視線というのは彼女のことだったのかもしれない、と頭の中で考えながら僕はもっと別のことを考えていたような気がする。とりあえず服を着て、ズボンのボタンをしめた。そして、ベッドから降りる。

牧原はたぶん美咲に負けたくないだけなんだ。僕のことを好きなんて言っているけれど、相手が美咲だからという理由でこんなことをしたんだとなんとなくわかってしまった。

「俺、帰るわ。お邪魔しました」

「彼女にこのことがバレてもいいの!？」

「別に。未遂だし」

僕はぶつきらぼうに答え、乱暴に自分のバッグを手に取った。それでも牧原はひるまない。

「昨日のこと何も覚えてないんだね。そのほうが幸せかもね」

この言葉で僕の中の何かが切れた。

「お前のこと・・・嫌いになりたくはなかった」

「ばたんと扉を閉める。イライラしていたが、なによりも悲しかった。」

電車に乗って約30分で地元に着く。駅に停めである自分の自転車の鍵をはずし、僕はもう昼近い駅前をのんびりと走り出した。

昨日、牧原とは何もなかった・・・と思う。全く覚えてなかったが、変な話そういうような形跡がなかったのだと思う。それに美咲という大事な人がいるのだから、いくら酔っていても理性が働くだらうと信じていた。

それでも、イブに彼女以外の別の人と同じベッドでぐーぐー寝てしまったことは確かだ。最低だ・・・なんでこんなことになっちゃったんだらう。

頭が痛いのを抑えて、僕はとりあえず自宅へ向かった。

家に帰ってまず最初に言われたことは、

「あんた今までどこに行ってたのよ!? 美咲さん待ってるんだから!」

母が僕に掴みかかって怒鳴ってきたのだ。慌ててリビングに行ったが彼女はいない。後ろから母に僕の部屋にいることを教えられて、急いで階段を駆け上がっていく。ばたんと大きな音をたてて部屋の扉を開けた。

「あ、お邪魔してます」

僕の勉強机のイスに座っている1人の女の子がぐるりと振り返った。ミニスカートにハイソックス。彼女が普段はあまりはこうとしないスカートを見て、今日のためにはいてきてくれたんだと気づき、僕はわけもわからず良心が痛んだ。

全部話さなきゃな・・・後ろめたい気持ちのまままで彼女と一緒にいられるわけがなかった。これがきっかけで別れるなんて言われても仕方ないかもしれない。美咲にだけは嫌われたくない。だけど・

僕は牧原の名前だけ伏せて、だいたいのことを話した。昨日は大学の友達と飲んでいたこと、酔った勢いで彼女の家に泊めてもらったこと、でも何もなかったという^{つたな}ことを拙い言葉遣いで長々と。美咲は相槌を打つこともなく、ただ黙って聞いていた。

「・・・ほんとごめん! 俺、最低だっけわかってる」

がばつと頭を下げたが、しばらく美咲からの返事はなかった。ようやく聞こえたと思ったら衝撃の言葉だった。

「孝介、口に赤いものついてる」

え、と驚いて自分の口を押さえると、確かにうつすらと赤い。それが牧原の口紅だと気づくの^に時間はかからなかった。

「いきなりだったから避けられなかったんだ・・・本当だ。ウソじゃない」

傍から聞けば、なんて苦しい言い訳なんだと思われるかもしれない

いが、本当のことなんだからどうしようもない。信じてほしくて、情けなくただ美咲を見続けた。その顔は笑ってはいなかったが、あからさまに怒ってもいなかった。もし僕を殴って気が済むのだったら、どんどん殴ってほしい。

「嫌われても怒られてもしょうがないと思う」

「怒ってない。前に形だけだけど、私に婚約者がいたときだって、孝介は私のこと怒らなかつた。だから怒らないし、嫌いになれない。だけど・・・孝介は、その人のこと好きなのか？」

美咲は僕の顔を見ずに淡々と言い放つ。

「その人のことを恋愛感情で見たことはないよ。好きじゃない」

それは牧原に対してとてもひどいことなのかもしれない。だけど、はつきりと言わなければ美咲には伝わらないような気がしたのだ。

今日初めて美咲と目が合った気がした。彼女は少しだけ笑ってこくんとうなずいた。その笑顔が僕には痛々しかった。

その後、僕たちはデートをした。

夕食に美味しいと評判の洋食店を予約してあったので、その時間までぶらぶらと散歩に出かけた。行き先は特に決まっていなかった。だ、気の向くままに歩いた。お互いあまり喋らなかつた。以前の僕は女の子とデートをして沈黙になると気まずくて何か話さなければと考えたことがあつた。でも、美咲とつきあってからはそんなことは考えなくなった。沈黙もまた楽しい。だけど、今日は辛かつた。夕食はおいしかつたんだけど、後になって思えばどんな味だったのか覚えていない。

「え？ツリー見に行くんじゃないの？」

洋食店を出て、彼女が行きたいと言い出したのは僕らにとって大切な場所、例の無人の展望台だつた。

「駅前だと迫力があつて綺麗だけど、展望台からのほうでも小さいけど綺麗に見えるって小笠原おがさわらさんが教えてくれた」

小笠原さん？誰だっけ、それ。僕は首を傾げたが、彼女に連れられてそこへと向かう。そういえば、駅は海の近くにある。そう考えれば、展望台からも見えるかもしれないと位置的に僕は思った。

展望台はやっぱり誰もいなかった。この時期、ここは寒すぎるし、今は海も真っ暗だ。誰も来ないだろうと納得していると、先に上った美咲が手招きをしてきた。

「見えるよ」

「わ・・・ほんとだ。穴場じゃん、ここ」

予想以上に綺麗に大きく見えた。元々ツリーが高い位置にあつて大きいのだろう。むしろここから見たほうが綺麗なんじゃないかと思えるほどだ。白い光や青い光が一面に広がっていた。

「綺麗だな・・・」

吐く息が白くなって夜の闇に吸い込まれていく。風も少し強まってきた。

と、そのとき、視界の片隅に白いものが落ちてきた。それが雪だとわかる時にはさらさらと降り続いた。美咲は嬉しそうに雪を手で受け止めている。僕はその横顔に話しかけた。

「美咲、メリークリスマス」

振り返った彼女に縦長の箱を渡す。それはオープンハートのネットクロスだった。彼女はそれを大事そうに持ってあげがとうとお礼を言つて、バッグから何かを取り出す。それは僕の前に差し出された。「センスないけど」

それはキーケースだった。まさかもらえるなんて思っていなかったのですごく嬉しかった。僕はそれを大事に使おうと決めた。

「ホワイトクリスマスだな。なんかすげー嬉しい」

その嬉しいはたぶん雪が降っただけではないのだが、寒さも苦しくないし、僕自身はなぜか幸せに思えてきた。

「・・・嬉しくない」

だけど、美咲は違つたらしい。嬉しくないと言われて結構大きな衝撃を受ける。そうだ、僕は美咲に嫌われてもおかしくないんだ。

最低最悪なことをしてしまった。クリスマスイブに別の女性と会って、何もなかったが一晚共にしたなんて。

「ごめん・・・俺も飲みすぎた・・・でも何もなかったから！」

「あつたよ！キスしたんでしょ!？」

「それは向こうが無理やり・・・っていうか、いきなりで」

そこまで言いかけたとき、美咲が泣いていることに気づいた。彼女の涙を見るのは久しぶりで、僕はこの涙が辛かった。でも、このまえと違うのは、美咲は泣きながらだんだんキレかかっているということ。空気でわかる。

「私以外の人とキスすんな。なんか嫌なんだ。すっごいイライラする」

それはヤキモチ？明らかに怒っている美咲を見て、失礼だがまた嬉しくなった。まさか美咲がヤキモチをやくななんて思ってもみなかったのだ。

「そうだ、美咲にまだ言っていなかったことがあるんだ」

「な、なんだよ・・・今度は」

明らかにびくびくしている美咲。僕は苦笑しながら、彼女の肩に手を回して引き寄せる。驚いてしゃがみこむので、僕もしゃがむ。そのまま座り込んでしまった。

「好きだ・・・ってまだ面と向かって言っていなかったから」

「え・・・そうだった？」

「別の言葉では言っただけだね。俺はもう美咲以外の人とはキスもしないし、飲みません。だから、美咲も俺に嫉妬させないでください。僕は座り込んで壁にもたれかかる彼女に長い間キスをした。寒さなんて感じられなかった。お互いに高潮した頬をしていて、息遣いだけが荒かった。

「好きだ。大好きだ、美咲」

『小笠原さん』が来たのはその数分後のことだった。すっかりキスに夢中になっていた僕は美咲に体を押されて初めて人の存在に気

づいた。

「小笠原、さん」

美咲は息を吐きながらつぶやく。美咲はその状況で荒くなった呼吸を整えようとしていたが、僕は息をするのも忘れて彼を見た。

あの尾行男だった。

第16話 約束

岸本徹に尾行を命じられて、忠実に美咲を尾行し続けていたあの男がなぜ彼女と一緒にいるのだろうか。その疑問が僕の頭の中でぐるぐるしていた。

「小笠原さん。通称おがちゃん。私をつけてたけど、悪い人じゃないんだ。私が勝手な行動してもいつもかばってくれた」

その人を君は倒したじゃないか。まあ倒せと言ったのは僕だったが。

美咲はぱんぱんとコートの砂を払う。

「いろいろあつて家で働いてもらうことにしたんだ」
「いろいろつて・・・」

僕は真正面からじつと美咲を見つめると、彼女はぎよつとしたような顔で目を背ける。一瞬不安になったが、美咲が少し赤くなって顔を隠しているのがわかった。それが照れ隠しだと気づいて、僕自身も急に恥ずかしくなつてうつむいた。

「あの、ウブコントはそれくらいにしておいてもらいたいのですが」
小笠原がごほんと咳払いをする。

「いいところを邪魔してしまったことは謝りますが、こんな寒い中、いつ人が来るかもしれない場所で何してるのですか・・・」
「いや・・・ツリーを見に・・・」

別にウソは言っていないのだが、僕らは微妙にたじろきながら答える。ちなみに、小笠原がここへ来た理由は僕たちと同じで、自分の奥さんと一緒にここからツリーを見るためだったそうだった。たぶん僕たちが先にいるのを見つけて、まあしていたことがしていたことだったため、思わず隠れてしまったそうだった。奥さんは階段の中腹で照れたように立っていた。

こうしてクリスマスが終わった。

冬休みの間に結婚の準備は順調に進んでいった。婚約指輪を購入し、衣装も決めた。式場との打ち合わせも本格的にし出し、いよいよ結婚というものが身近に感じられてきた。新婚旅行の計画も立てられた。僕としてはどこでも良かったので彼女に意見を求めると、「タイがいい。知り合いがいるんだ」

と言われた。タイなら時差ボケもそんなにひどくならないだろうし、割と近かったので経済的に助かる。僕もそれを承諾することにした。

「そういえば、知り合いって？」

「すつごくいい人なんだ」

美咲が嬉しそうに話すので僕も会ってみたいと思った。

新婚旅行先が決まり、一番悩んでいた仲人を誰にやってもらうかもようやく決まった。

「私なんかでよければ喜んでやらせていただきます」

小笠原さんだった。

冬休みが終わり、大学がまた始まる。

僕は大学内を歩くとき、無意識に牧原千絵を捜すようになった。しかし、学部が違うとめったに授業がかぶることはない。3年生にでもなるとさらにそうなる。どうせ見つけることは無理だろうな思っている、見つけた。世の中こんなものである。

「牧原」

ちょうど授業が始まる2分前、たまたま全学部がとれる心理学の授業で女友達と談笑している牧原を見つけた。笑っていたので安心したのか、僕はみんなの目の前で堂々と話しかけてしまった。

「ちょっと話があるんだけど、今時間大丈夫？」

今さら笑顔になんてなれなかった。牧原はしばらく感情の読みづらい表情をしていたが、やがて小さくこくんとうなずいた。僕が歩き出すと、黙ってついてきてくれた。牧原の友達がひしひそと話し込み何か誤解しているようだが、構わずに歩く。僕らは外に出た。

「彼女とはどうなったの？誤解は解いた？」

「やっぱり誤解だったんだなと内心安心しながら僕はこくんとうなずく。」

「今日はお願いがあつて来たんだ。美咲をつけまわすのをやめてほしい」

僕はまっすぐに牧原を見て言い放つ。女性に対する態度ではないかもしれないが、僕はクリスマスのことを許すわけにはいかなかった。しかし、当の本人は何のことだかわからないようにきよんとしてしまった。今さらしらばくれる気だろうか。

「もう気づいてるよ。牧原が美咲をつけてるっていうことは。よく家の近くで視線を感じるって言ってた」

「違う・・・私じゃない！美咲ちゃんなんて知らない！」

え、と僕が驚いている間に彼女は僕の服にがしつとしがみついていた。

「確かに、私はイブに孝介君を酔わせて自分ちに連れてったよ？孝介君、私に何にもしなかったけど！でも、美咲ちゃんをつけたりなんてしてない！」

僕は何も答えられずにただ黙っていた。牧原のその表情で本当のことを言っていることがわかる。僕はそれを信じたい。次に何を言うべきかしばらく迷っていると、牧原は僕の態度を疑惑と受け取ってしまったようだ。

しばらくして、牧原はポケットから何かを取り出した。それから、僕の左手を掴んであるうことが指輪を取られてしまった。

「あ！」

「こんなの・・・！」

牧原の手からそれは弧を描いて、手入れのされていない草むらに入ってしまった。

草むらに入り、四つんばいになって地面を探す。牧原が投げた何か。ちらっと見えたが、あれはひよつとしたら・・・

そのとき、草で指先を切ってしまった。右手人差し指に一筋の血がにじんできたが、無視してまた探し出す。

授業の始まりと終わりのチャイムを4回聞いた。

このときの僕は絶対に探し出さなきゃという思いにかられながら、中学生のときのことを思い出していた。

中学3年生のとき、当時隣の席だった牧原にこんなことを言われたことがあった。

「孝介君のミサンガってかっこいいよねー！」

そのとき僕がつけていたらしい黄色いミサンガはクラスの男子の間ではやったものだった。そんなことを言われたことがなかったのだ、僕は嬉しくなった。なにより牧原千絵に言われたのだ。

「だろ！これ超気に入ってたんだよ」

「いいなー・・・私もこういうのほしいな」

牧原がミサンガを羨ましそうに見るので、僕はあることを思いついた。

「それ、あげるよ」

「え、でも・・・」

「俺は別のあるからいいよ。その代わりに、大事にするって約束できらんなら譲る」

にっとなつと、牧原はしばらく僕を見てただじつとしていた。

「なんだよ・・・いらんないんなら別にいいよ」

「ううん！いるよ！絶対大事にする！・・・ありがとう、孝介君」

「もう8時過ぎてるよ。まだ探してんの？」

後ろから牧原の近寄る気配がしたが、僕は振り返らなかった。あれから何時間も探しているのに、まだ見つからなかった。冬だから、

暗くなるのが早い。ケータイの液晶画面で照らしているのだが、電池が切れかかってきてそろそろやばい。

「・・・指輪なら投げてないよ。返すから・・・もうやめてよ」

「あ」

僕は探していたものをようやく見つけて、拾い上げる。それを目で確認して振り返った。牧原の前にくいっと差し出す。黄色いミサングだった。

「大事にしろって言っただろ」

僕は苦笑して牧原に握らせる。彼女は驚いた顔で固まっていた。

「なんで・・・？」

「指輪は投げてないってわかった」

「知っててなんで・・・！？」

「言っただろ？それあげるときに大事にしろって。本人の目の前で捨てないでよ」

僕は指輪を受け取って、左手の薬指にはめる。そして、牧原を見た。

探しながら、ようやく僕は気づき始めた。以前彼女に告白をされたとき、それは美咲に対する対抗心からだと思っていた。だけど、僕でさえ忘れていたミサングをずっと大事にしてくれていたことを知ってわかった。牧原は本当は僕のことが好きだったんだ。

「ごめんな・・・ずっと気づかなくて」

その言葉で牧原が泣き出してしまった。嗚咽おんげつを押し込んだような苦しい泣き方。僕は最近女性を泣かせてばかりだなと頭の中で思う。「・・・嫌われたくなかった・・・嫌いならもう優しくしないでよ！」

「嫌いじゃないよ。友達としてこれからも付き合っていきたい。でも、一生友達以上には見れないんだ。ごめん・・・」

牧原はもう何も言おうとはしなかった。僕は彼女の肩に軽く手を置き、ぽんぽんと頭をなでた。それしかできなかった。

牧原を家まで送っていくと、彼女は去り際にぼつりとつぶやいた。
「今まで迷惑をかけてごめんなさい・・・でも、美咲ちゃんをつけてないってことは信じてほしいの。それから・・・これありがとう」
美咲は左手首のミサングを顔の高さまで上げる。僕はうなずいた。
「式、招待状送ったら来てくれる？」
「行くよ」
「約束な」

僕は笑顔でその場を離れた。

だけど、気になることがまだあった。美咲の感じていた視線は誰だっただろうか。彼女に何もなければいいと思いつながら僕は1月の夜を歩いた。

第17話 ライバル登場

招待客リストを作ってみると、明らかに美咲の知人のほうが多いのがやっぱり家柄の違いだと思う。どんな生活をしてきたのかは知らないが、国会議員までまで呼ぶことになっていることには本当に驚いた。

1月も半ばになった。あれから美咲の感じた視線の正体はまだわかっていない。しかし、最近は誰の視線も感じないとの話なのでひとまずは大丈夫なのかなと思っっている。

「いざとなったら俺がかばう」

守ると言えなかったのはなんとなく恥ずかしかつたからだ。しかし、美咲は凛々しい顔で言い放った。

「やられる前にやれ。やられたら10倍返し。自分の身は自分で守れ・・・これじーちゃんの受け売りだ」

あのじーさん、そんなことを孫に教えてるのか・・・僕はげんなりとしてしまった。ここは頼ってほしかつたけれど、いざとなつたら自分が盾になる気である・・・最悪なことだけが浮かんでくるのはなぜだろうか。

美咲の部屋で、ベッドに無防備にごろごろと寝転がる美咲。襲つてやるうかと考えなくもなかったが、クリスマスするときから僕が彼女に、例えば肩に偶然ちよつと触れただけでびくつと過剰反応されるようになってしまった。そんなふうにされると手もつなげない。

「あ、そうだ。美咲って牧原と同じ高校だったって言ってたよな？ クラスの男子半分を自分に告白させたってどういう意味？」

それとなく聞いてみると、美咲は明らかに怪訝な顔をした。しまった、唐突すぎたかなと内心焦つたが、彼女はちゃんと答えてくれた。

「男に媚売こびって自分に告白するようにさせたらしいけど、噂だと中学のときから好きな人がいたから全部断ってんだって」

僕は複雑な想いになった。その好きな人はもしかしたら自分のこ
とかもしれない。いや、思い上がりだ、きっと。

「ねー孝介。今行きたいところある？」

「んー・・・温泉」

美咲の唐突な質問に僕が上の空で答えた答はなんだかジジ臭く思
えた。でも、なんだかゆつくりと温泉に入りたいんだ。

「温泉か！いいな・・・よし！行こー！」

「は？今？」

「違っよ。2月に入ってからとか。独身最後の旅行で」

なんだか笑顔でそんなことを言われるので、かわいいなあと思
いながら僕は行こうとうなずいた。

「美咲、ちよつといい？」

部屋のノックと共に聞こえたのは美咲の母親の声だった。

「なーに？」

遠慮がちに開けられるドア。お母さんはおそろおそろというよう
な顔で入ってくる。真ん中のテーブルの上で招待客リストを作っ
ている僕とその一部をベッドの上でごろごろと寝転がってみている美
咲を見て安心したように息を吐く。

「よかった・・・もしラブラブな時間を邪魔しちゃったらどうしよ
うかと思ってたの」

「何言ってるの、母さん」

美咲はその真意を理解していないようだったが、僕は意味がわか
って何も言えずにいた。それにしてもこの人は娘の身をもっと心配
したらどうだろうか。

「それより、お客さんが来てるの。ここにお通ししていい？」

「お客さん・・・？」

美咲が訝しげな顔になる。しばらくして部屋に入ってきたのは背
の高いひよろりとした青年だった。

「美咲ちゃん・・・久しぶり・・・」

背の高さとは裏腹に、ずいぶん自身のなさそうな声をしていた。

人の良さそうな顔で遠慮がちに笑う。

「あ……学まなぶ」

美咲がその名前を呼ぶと、僕は下の名前でその男を呼ぶので少しむつとなり、遠慮男は逆に嬉しそうにぱあっと表情を明るくさせた。「わっわかる？美咲ちゃん。中学のときまでよく一緒に遊んだよね！」

「そうだったよな。中学卒業したらすぐにタイに行っちゃって……今日戻ってきたのか？」

「うん。もつと前から日本には戻ってきてたよ。もし美咲ちゃんに忘れられたら嫌だったから、なかなかここに遊びに来れなかったんだ」

完全に僕のついていくことのできない話でぽつんと外野に追いやられてしまった。話の端々を聞いていると、小学校、中学校と同じ学校だったらしいが、彼は高校に進学せずに親の仕事の都合でタイに引っ越してしまったそうだ。ひよっとしたら、美咲がタイに新婚旅行に行きたいと言い出したのは、彼に会うためかもしれないかった。いや、絶対そうだろう。一体どういう関係なんだろうか。

「あ……もしかしてあそこにいる人が……美咲ちゃんと結婚する人？」

急に話が振られてさすがにびっくりした。顔を上げると、ドア近くで話し合っていた美咲と学とかいう青年がそろって僕を見ていた。

「うん。葉山孝介っていうんだ」

紹介なんてされると照れくさい。僕は慌てて頭を下げた。

「あ、はじめまして。美咲ちゃんの同級生だった高見学たかみです」

と、これまた深く頭を下げられる。なぜかまた僕も頭を下げる。すると、高見も頭を下げ返す。なんだかその繰り返しだった。

「とにかく中に入んなよ。久しぶりでいっぱい話したいことあるしさ」

美咲は彼を中に入れる。そこまでは良かったのだが、ふいに僕の

ほうを見て、

「今日はもうこのくらいにしようか。孝介、ここにいたってつまらないだろ」

そう言っつて僕を部屋から追い出した。

ありえない。

この日から僕は何度この言葉を思うことになるのだろう。婚約者を追い出して自分の部屋に別の男を入れるか普通。

21歳にしてはジジ臭いため息が漏れた。

美咲は僕のことか本当に好きなのだろうか。以前から考えていたことである。岸本という婚約者がいたときだつてそうだ。彼から解放されたいがために僕とつきあうことにしたようにも思えてきた。

美咲と一緒に過ごした夜だつて、もしかしたらただ思い出を作りたかっただけなのかもしれない。

考えれば考えるほどダークな気持ちになつていく。

だけど、美咲は僕といるとよく笑ってくれるし、プロポーズだつて受けてくれた。

僕は美咲を信じてる。

しかし、ありえない話はまだ続いていく。

まず、あれから美咲に会っていないということだ。ケータイで電話をしても、美咲は用があるからと会つてくれない。バイトもなかったなので、仕方なく1人でぶらぶらと近所の大型ショッピングセンターに行つたら、なんと美咲と高見に会つたのだ。

「え、美咲と・・・高見さん？」

話しかけると明らかに2人ともやばいという顔をした。まるで浮気でもしている恋人同士のようなのだ。

「こ、孝介・・・1人で買い物か？」

美咲がおずおずとしながら尋ねる。その態度に僕はむっとした。こつというのをたぶん嫉妬つていうのだろう。

「そうだけど・・・美咲の用ってこれだったの？」
なるべく平静を保って言葉を発する。ヤキモチをやくなんて初めてのことだったからどう対処していいのかわからない。

「そう。買い物に付き合ってもらってたんだ。じゃあ・・・」

それ以上話すことはないらしい。買い物なら僕に言えば良かったのにと内心思いながら僕はちらりと高見を見る。彼は僕に1度ぺこりと頭を下げて、まるで当たり前のように美咲の隣で歩き出した。やきもきした気持ちを抑えて、僕は2人とは反対方向に歩き出す。と、そのとき後ろからぐいっと腕を引っ張られた。驚いて振り返ると、美咲が真剣な面持ちで自分のほうへ僕を引き寄せた。

「誤解すんなよ」

「え、あ、はい・・・」

その言葉をどんなふうに取りればいいのかわからなかったが、自分の都合のいいように取ることにした。しかし、その日送ったメールは次の日になっても返ってこなかった。

1月の終わり頃、その日は3限で授業が終わったので、早めに帰宅できる日であったから、嬉しい日になるはずだった。高見学に会うまでは。

駅前で自転車の鍵をはずそうとしていると、視界に高見の姿が目に入ったのだ。思わず目が合ってしまった。

「あ・・・高見さん」

「どっどっも」

売れない漫才師のような挨拶をされて、高見は僕のほうへ歩いてくる。僕も自転車から手を放す。

「あ、あの・・・少しお話しませんか？」

「あ・・・はい。いいですよ」

どうも僕らの間では敬語が必須なんだろう。しかし、話といつても何を話したらいいのか思いつかない。意味もなくただ自転車置き場に立ち尽くす。

「えっと・・・美咲の同級生だったんですよね？美咲ってどんな中学生だったんですか？」

「今と全然変わらないですよ。正義感が強くて、曲がったことが大嫌いで、さりげなく優しくて・・・僕の憧れなんです」

その高見の言葉となげに頬を赤らめて話す仕草で気づきなくなかった真実に気づいてしまった。高見のその先の言葉が聞きたくない。

「僕、日本に戻ってきて真っ先に美咲ちゃんに会いに行こうとしました。でも、葉山さんと一緒に歩いてる美咲ちゃんを見て話しかけられなくて・・・それから何度も機会を待ってたんですけど・・・こないだ美咲ちゃんのお母さんに会ってようやく話せたんです」
そして、くるりと僕のほうを向く。

「僕は美咲ちゃんが好きです。葉山さんと結婚するってわかっててもこれだけはどうしようもないんです。だから・・・美咲ちゃんに告白します」

僕は何も言えなかった。高見の気持ちの本物だって気づいてしまったから・・・

第18話 誰とも比べられない

「孝介・・・？孝介！」

はっとして顔を上げると、僕は我に返った。一瞬、自分がどこで何をしているのかわからなかった。しばらくして、ようやく僕の家で美咲と一緒にいることを思い出したとき、彼女が不思議そうな顔で僕の顔を覗き込んできた。

「どうしたんだよ。ぼーっとして」

「や、なんでもない。ごめん、考え事してたんだ」

高見学に美咲を好きだと宣言されて2日たつ。この頃の僕はそのことを考えてばかりいる。まさか結婚まであと3ヶ月というときにライバルが現れるなんて思ってもみなかった。たぶん、美咲が感じていた視線というのも高見だったんだろう。

結婚しても美咲を束縛する気はないので、誰と遊びに行こうがいちいち気にすることではない。しかし、相手が美咲を好きなら話は別だ。

「そっいや、美咲、タイに知り合いがいるって言ってたよな？それが高見さんのことなの？」

内心の不安を悟られないようにして、僕はなるべくいつもどおりに話す。

「学もだけど、学のお姉ちゃんにも会いたいんだ。忍しのびびっていうんだけど、あの人もいい人。キョーダイだけど、同じ学年なんだ」

言いながら、美咲は僕のことをじっと見てくる。たまにくるこのまっすぐな視線になぜか照れくさくなる。だけど、今日はより一層にらむように見てくるような気がする。

「え・・・？何、か？」

「誤解すんなって言っただろ」

「してないよ」

僕はそっぽを向く。この態度を不審に思ったのか、美咲はなぜか

僕の首を絞めてくる。いや、苦しいんですけど・・・

「なんもねーよ！誤解すんな。されたら困るんだよ」

「わかってるよ。わかってっけどな・・・」

そのとき、僕は美咲の髪の毛に白い糸くずがついているのに気づいた。なにげなく取るうとして手を伸ばすと、彼女の耳に触れた。

と、美咲は急にびくつとなつて縮こまってしまった。僕は糸くずを彼女の目の前に差し出す。

美咲は驚いたような顔で固まっていた。

「何もしないから大丈夫だよ」

苦笑して僕が糸くずをごみ箱に捨てるのと、美咲が後ろから僕に抱きついてくるのはほぼ同時だった。

「違う・・・孝介だったら・・・だー！恥ずかしいんじゃ！言わすな！ボケエー！！」

そのまま僕の体を放り投げ、僕は空を飛んだ。気がついたら、美咲は怒ったからか羞恥心からか僕の部屋から飛び出してしまっていた。僕はというと、背中を思いっきり打ち付けてしばらく動けなかった。

久しぶりに大学のサークル室を訪れると、珍しく誰もいなかった。なんだと思いつながらなにげなく黒板を見ると、『葉山先輩、結婚おめでとございます！』とかヒューヒューとか書いてあった。明らかに三田と思われる字で、『子供ができたら報告しろよ』とも書いてある。

「あ・・・葉山先輩！」

驚いて振り返ると、今まで少し避けていた木下愛の姿があった。

「春休みになったらみんな先輩の結婚祝いをしようって話し合ってたんですよ！でも先輩全然来ないから・・・」

ブーツをこつこつと鳴らしながら、木下は僕に駆け寄る。

「先輩・・・ううん。こーちゃん。結婚おめでとっ」

つきあっていた頃の呼び方で呼ばれて少し驚いた。でも、今だか

ら言えるのかもしれない。僕も素直に笑い返すことができた。

「今だから言うけど、こーちゃんは私が今までつきあってきた人の中で1番最低でした」

しばらく2人で話し合っていたとき、ふいに木下がそんなことをつぶやいた。もちろんわかっていたことなので、僕は苦笑いをしてうなずく。

「だって俺疲れたような顔してたんでしょ？」

「うん。初めてこーちゃんを見たときに若々しさより10歳年とっちやっただカンジ」

老けたのか・・・確かにジジ臭いと自分で思う。

「ねえ・・・今幸せですか？」

僕はその質問に一瞬言葉をつまらせた。普段の僕だったら迷うことなく幸せだと答えるのだろうが、高見の出現以来おもしろくないことが続いている。どうしてもそのことが気になってしまって、情けなくなってしまう。

「何かあったの？」

心配そうに覗き込んでくる木下。僕は少し笑った。

「なんつーか・・・ライバル登場ってやつで、俺、今どうすればいいかわかんないんだよ」

本当に情けない。昔の彼女に何を言っているのだろうか。それでも僕は木下に返事を求めていた。こんなふうに相談できる相手なんて、僕にはそんなにいないのだ。やがて、木下は口を開いた。

「そんなの私だって知らないよ。自分で確かめてみるのが1番早いんじゃないの？」

その通りだ。当たり前すぎる答に僕は笑えてしまった。木下がきよとんとしたような顔で見ってくる。ようやくすつきりしたよ。美咲に会って、彼女の気持ちを確かめてみよう。

今日はサークル室に来てよかったと思う。木下とも話げできたし、自分の気持ちにも整理がついたから・・・

週の後半の木曜日、僕は事前に美咲に電話をしておいて、彼女の家に向かうことになっていた。表向きは結婚式の準備のためだったが、僕の真意は別にある。

ちなみに、お互いに自転車通いをしていた。車を使ってもいいのだが、美咲の家はともかく、僕の家には停める所がないのと、二酸化炭素削減のために地球に優しくいこうと美咲が言い出したので、僕はいつも超ハイスピードで自転車をこいでいる。

その日も、学校帰りに自転車を走らせていたとき、彼女の家のすぐ傍にある公園に見知った人の姿を見た。

「高見・・・何してんだ」

相手がいないと敬語を使わないどころか、さん付けもなくなる。とにかく高見が公園を散歩しているのだ。あまり乗り気ではなかったが、後を追ってみることにした。

そして、信じられない光景を見た。

それはあまりにもゆっくりりな光景で、高見が美咲を抱きしめたのだ。

「ずっと好きだった！」

はつきりと耳に残る高見の声。

そのとき、僕が飛び出してしまいそうになるほんの少し前、美咲が思いつきり高見をぶっ飛ばしているのが見えた。僕は思わずその場で固まった。

「ごっごめ・・・いきなりだったから・・・」

美咲が慌てて高見に駆け寄る。腹を押さえて彼は起き上がった。

「そんなに嫌われてるなんて思ってた・・・」

「ち・・・違う！学のこと嫌いなわけじゃないよ！・・・でもそういうんじゃないんだ。私は・・・誰とも比べられないくらい好きな人がいて・・・ほんとに孝介が好きだから・・・だから」

これ以上僕が聞いてはいけないような気がした。僕は自転車を引いてその場を離れた。

ここから先は後になってわかることだ。

「はあ！？俺がいること知ってて告白したのか？」

僕の家遊びに来た高見はそんなことをけるりと言ったのけた。おどおどしている様子はなく、むしろ楽しんでいるように見える。

「はい。美咲ちゃんが好きなのは昔の話です。今はタイに恋人がいるんです。でも、彼女に話しかけるのはやっぱり緊張します。それほど美咲ちゃんが大切だったんです。だから、葉山さんを試ししました。美咲ちゃんをちゃんと守れるのかどうか・・・」

そう言って、くるりと僕のほうを向いた。

「美咲ちゃんには葉山さんが必要みたいだし」

「・・・俺にも美咲が必要なんです」

僕は照れることなく答えた。そして、後ろにいた美咲に顔を向けた。彼女は拳動不審にしている。どうやら、あの告白のときに僕がいることを美咲は知らなかったらしい。

「そんなに俺が好きだったんだ」

「うるさい！！」

嬉しくてがばつと美咲に抱きつく。しかし、次の瞬間、僕は数秒間空を飛ぶことになった。僕には決して謝らなかった。

誰とも比べられない。僕も美咲が大好きだ。

第18話 誰とも比べられない（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

物語はそろそろ終わりに近づいてきました。

どうか最終回までもう少しお付き合いください。

第19話 幸せな夜

岐阜県にある有名な温泉地。僕たちは独身最後の旅行としてここを訪れていた。

「どうぞゆっくりお過ごしください」

人の良さそうな中居さんが部屋を出て行くと、僕らは案内された部屋でぐてーっと横になった。なぜかここまで来るのに6時間もかかってしまったのだ。さすがにずっと車の中にいたのでいろいろなところがみしみしと痛み始めてきていた。

「孝介ーご飯何時だったっけー？」

「7時ー」

それまで何をしていたようか。ごろごろしながら考えているうちに風呂に行こうという話になった。

いつもより広い浴槽。僕は男湯にぎぶーんと入った。冷えた体が温かくなっていくのを感じるのが僕は好きだった。とても気持ちがいい。

以前僕が温泉に行きたいと言ったことを彼女は覚えていてくれたらしい。その後、彼女は温泉地のパンフレットをもらってきて、結婚の話と並行するような形で僕らの独身最後の旅行の計画が進められていった。

僕としては美咲といられるならなんだってよかった。それにしても当たり前のように部屋を1つしか頼まなかったけれど、いくらなんでも強引だっただろうか。僕がインターネットでの予約の際に部屋のことを聞いてみると、お金がもつたいないから1つでいいと言われたのだ。

もうすぐ結婚か……

一瞬だったが、一緒にお風呂に入る日が来るのかもしれないと考えてしまった。なぜかそれは僕としては微妙に思えた。

1年前の僕だったらこんなにも早く結婚するなんて思いもしなかった。だから、今の自分が不思議だった。たぶん結婚は早い遅いじゃないと思う。この人と結婚したいと思ったときがそのときなんだと僕は思った。

温泉から出て、部屋に料理が運ばれてきた。普段の僕たちが食べれないような料理がテーブルの上に並び、僕らは意味もなくはーっとため息をついた。

「よっしゃ！残さず食べるよ」

今のところキノコは見当たらないが、美咲はじろりと僕をにらむようにして見てくる。はいはいとうなずきながらふと美咲に好き嫌いはないのだろうかと考えた。食事の間何気に観察していたが、美咲が何かを嫌ったり避けたりする様子はない。

「美咲って嫌いなものとかないんだ？」

食べることに集中していた彼女は初めて気づいたかのように顔を上げる。

「あ、ないかも。昔はさ、野菜とかあんまり好きじゃなかったらしいんだけど、母さんが無理やり食べさせたらそのうち食べるようになったんだって」

「へー頼もしいねえ・・・」

結婚したら、キノコを無理やり食べさせられる自分の姿が想像できた。ちなみに、結婚後に僕たちは一緒にマンションに暮らすことになっている。

「もうすぐ結婚するんだなー」

ふと美咲はつぶやいた。僕は急に不安になった。

「今さらやめたいなんて言わないでよ」

「言わないって。だけど、今まで誰ともつきあったことがないから、孝介って物好きだと思った」

「それはこっちのセリフだよ。今まで誰ともつきあったことがないんなら、なんで俺なんて選んだの？性格がいいわけでもないし、別

に顔がいいわけでもないし・・・おじいさんがお見合いさせたから？」

矢継ぎ早にした質問に美咲は少し困ったような顔をした。美咲だったら僕なんかじゃなくてもっといい人がこの先現れるような気がする。すると、美咲はあっさりと言い放った。

「物好きな男が好きなんだよ」

11時過ぎ、2度目の温泉から戻ってくると、部屋には2組の布団が敷いてあった。

「私こつちがいいーい！」

「えっ！俺だつて窓側がいいよ！泥棒来たら、美咲が守つてよ！」

窓側の布団を争つて、僕と美咲はケンカになった。もちろん僕はどっちでもよかったのだが、美咲がムキになるのが面白い。

「サイツデーだ！女に守つてもらうなよ！」

「だつて美咲は・・・」

唐突にぶちつと途切れた会話。争い合っているうちに、美咲の浴衣がはだけて少し中が見えてしまったのだ。いや、わざとじゃないんだけど。見るつもりはなかったんだけど。自分に言い訳をしながらアタフタとしていると、美咲も慌てて浴衣を直した。

「スケベ」

「わざとじゃないって」

数秒間意味もなく目が合った。しかし、美咲にふいつと顔をそむけられてしまった。まだだめか・・・わかつていたことだが拒絶をされるとシヨックだ。そういえば、クリスマス以来キスもしてない。微妙な雰囲気の流れってしまったので、僕はテレビをつけることにした。

『あなたの宝物はなんですか？』

いきなりそんな音が聞こえて、一拍置いてそれがCMであることに気づく。つまらなかつたのでチャンネルを変えてみたが、どれも面白くなかつた。仕方がないので、今まで1度も見たことのないド

ラマを途中から見ることにした。

「私の宝物さ・・・」

唐突に美咲が喋りだした。

「指輪とネックレスかな」

何を急にそんなかわいいことを言うのだろうか。僕の中の理性が耐えられなくなってしまうのを感じた。

「美咲・・・あんまかわいいこと言うと俺襲っちゃうよ？俺だって男なんだから」

それはひとり言のつもりだった。だけど、美咲は窓側に敷いてある布団の上にすとんと座りこんだ。

「窓側がいいんだろ？」

「・・・怖くないの？」

「私に怖いものなんてない・・・けど、痛いのはやだ」

僕はテレビを消した。美咲がすごく緊張しているのがわかる。怖くないなんて言ったくせに震えてるじゃないか。

「じゃあ・・・痛かったら言っつて」

僕は電気を消した。

夢の中にいるかのようにだった。久しぶりの美咲とのキスだけでも緊張してしまった。僕は美咲を寝かせて、腕で自分を支えて、美咲に体重をかけないようにして覆いかぶさる。こんなに激しいキスは今までしたことがなかった。

少し唇を放して、しばらく息を整えていると、1度だけ美咲が僕の浴衣のえりを掴んで体勢を反対にしてきた。柔道の投げ技のようにも思える。そのまま美咲から僕にキスをしてきた。僕の髪や首をなでながら唇を吸う美咲はなんだかエロティックだった。

美咲を横に寝かせて、浴衣を脱がせる。彼女の白い肌が露あわになった。肌に唇を合わせていく。

もう誰にも邪魔されない。だから、僕はゆっくりと時間をかけた。時間をかけて1つになった。

「痛くなかったの？」

僕は美咲の長い髪の毛をなでながら尋ねる。僕の腕の中で彼女が少し身じろぎする。

「前よりは・・・全然」

そう言っつて、汗ばんだ僕の背中に手をまわしてきた。今日の彼女はなんだか大胆だ。

「じゃあ、怖かった？」

「ううん。途中から自分が変態になっていくのがわかった」

僕は美咲の前髪を上にした。僕らは目を合わせて笑い合った。その薄い唇にもう1度キスをする。軽いキスなのに、暗い部屋にその音がやけに大きく響いた。

翌朝、僕と美咲は同時に目を覚ました。お互いにテンションがとても低かったが、目が合うと急に恥ずかしさが込み上げてきた。

「おはよ」

「・・・おう」

僕は苦笑したが、美咲はなぜか顔を真っ赤にさせて布団を肩まで上げる。

「今さら恥ずかしがらなくても」

「う、うるさい。見るな」

「昨日の美咲は超激しかったな」

「言っつな!!」

枕が飛んできて、顔にぼつと当たる。

美咲とはこれで2度目だったが、最初的时候は彼女にとっては悲しいものでしかなかっただろう。だから、これが本当の意味で初めて1つになったときかもしれない。

嬉しかった。すごく幸せだった。ただそれだけだった。

第20話 結婚前夜

僕と美咲の結婚式も残り1ヶ月をきった。僕たちは式場との最終の打ち合わせをした後、新居に揃える新しい家具を見に行くことにした。

「料理も引出物も大丈夫、招待状はとつくの昔に送って大丈夫、ブーケも衣装も大丈夫、結婚指輪も大丈夫……写真も撮った……でも何か忘れてる気がするんだよな。何だろ」

「ほとんどのことは式場の人に任せてあるから大丈夫だろ」
隣で美咲があっさりと言い放った。

例えば、遠足の当日の朝、もう前日からちゃんと用意しておいたはずなのに何か忘れているような気がする。この典型的パターンに当てはまるのが僕だ。

その日、近所の大型家具専門店に入り、まず最初にリビングに置くテーブルを見た。

「これなんかいいんじゃないか？」

美咲が気に入ったのは目を疑ってしまうようなセンスのものだ。とぐるを巻いた蛇が大きくプリントされた丸いテーブル。こんなものの上にご飯を乗せて食べてもおいしくないような気がする。

「それよりこっちのほうがいいと思うけど」

僕としては無難なものを選んだつもりだった。しかし、美咲は明らかに嫌そうな顔をした。

「白は汚れが目立ちそうじゃん。それにあの部屋に白は似合わない」
確かに、それは言える。結局安くて茶色いものを買うことにした。それから、僕たちはだいたいの家具を揃えて、その後電化製品店へ行って冷蔵庫などの家電を買って帰った。

そして、月日が流れていく。

その間、僕たちは新しい家に引っ越して、すでに一緒に暮らし始

めている。

僕は初め、美咲がホームシックにかかるのではないかと考えた。しかし、そんな素振りは見せなかった。いや、僕にはバレないように悲しんでいたのかもしれない。もうすぐ僕たちは結婚するんだ。

結婚2日前、美咲と一緒に夕食を作っていたときだ。彼女が思いついたようにぼつりとつぶやいた。

「昨日、お風呂の排水溝が詰まったんだ」

いきなりなんの話かと思った。だけど、僕はうなずいて先を促す。「今まで排水溝の詰まりなんて気にしたことなかった。あれ、詰まらないようにいつも母さんが取ってたんだって」

「そうなんだ・・・」

「うん。離れて初めて気づくんだな。こういうことって」

一瞬、美咲が帰りたいなんて言うんじゃないかと内心ひやひやした。しかし、彼女はなぜか勝ち誇ったかのような顔をして、

「だから、私は母さんよりももっとできる奥さんになる！」

何をどう持っていけばそんな発想に至るのだろうか・・・と僕が思っていると、ぎゃつと悲鳴をあげて美咲が左手を高く上げた。

「どうした!？」

「手え切った・・・」

見ると、包丁で切ったような傷が左手の人差し指についている。ぱっくりと割れた指先からは血が流れ出ている。僕は無意識に彼女の手を取って傷の様子を見ていた。

「これくらいなら傷口を洗って消毒してバンソーコー貼っておけば大丈夫だよ」

美咲が顔を上げたので、僕は至近距離で目が合った。お互いに赤くなって目をそらす。もうすぐ結婚だっていうのに、なぜかまだ些細なことにとどきどきしてしまうのだ。

「そ、うだな。洗うよ」

「う・ん」

その後、まるで新婚夫婦のような緊張感の中で、僕たちは夕食作りを再開したが、鍋をかき回す彼女に僕は後ろから抱きついてみた。「火かけてるんですけど」

「ん・ん・ん」

答えておいたが、もう放す気はなかった。そのまま美咲は手を動かしかし続ける。黒いポニーテールからシャンプーのいい匂いがしてきた。

「美咲」

「なんだよ」

「眠い」

「寝ろ」

「一緒に寝るー？」

「1人で寝ろよ」

さりげない僕のアプローチをさらりと受け流し、美咲はやっぱり鍋をかき回し続ける。少しだけ見える頬が紅潮しているのを見て、僕は苦笑した。

なんだかすごい夢を見た気がした。結婚式の最中に美咲に1本背負いをされる夢だった。っていうか、最初は夢だと思わなくて、慌てて跳ね起きて何かに頭をぶつけるまでパニックに陥っていた。

「いたっ」

ぶつかったのは美咲のおでこのようだった。ダブルのベッドで一緒に寝ているので、隣に彼女がいるのは当たり前だ。少しして、頭がぶつかったのは彼女が僕の顔を覗き込んでいたからだと気づいた。「えっ？ごめん・・え、なんで・・？」

少し混乱しながら尋ねると、彼女は痛そうにおでこを押さえながら起き上がる。よく見ると、ぶつかった部分が赤くなっている。

「なんかうなされてるみたいだったから・・」

「夢か現実かわからないものを見た気がする」

「なんだソレ」

彼女が苦笑して離れようとするその前に、僕は美咲の後ろ首を引き寄せて、その赤くなったおでこにキスをした。

「明日は俺たちの結婚式だな」

「へ？そうだな」

きよとんとした顔で彼女は僕を見る。

「今日は実家に帰ろうか。独身最後に親孝行でもしよう」

美咲は少し黙っていたが、やがてにっこりと笑ってうんとうなずいた。もしここで美咲が親元を離れたくないと言ってしまったらどうしようかと考えたが、僕は自分を選んでくれることをちゃんと信じている。

美咲を実家に送ってから、僕は車で自分の実家に向かう。つい最近まで住んでいたのだから特別な感情を抱くわけでもないのだが、やっぱり自分の家が落ち着くのもかもしれない。妙な安心感が僕の中で湧き上がってきた。

「ただいまー」

最初に出迎えてくれたのは妹だった。いや、出迎えたというよりたまたま2階から降りてきたところだったらしい。

「あれ、もしかしてケンカでもしたの？」

開口一番がそれだった。

「してないし。独身最後に親孝行でもしようと思って」

「2人とも仕事行ってるよ。私もこれから部活だし」

そうか、帰ってきててもみんなないんだ。僕は妹が出かけるのを見送ってから、意味もなくテレビをつけたりして時間をつぶしていたが、ようやく自分にもできることを思いついて行動した。

午後7時頃、父が帰ってきて驚いた顔をされた。

「孝介がご飯を作ってる……」

僕が作ったのは鮭の塩焼きと味噌汁だった。普段あまり料理を作

ったことのない僕にとって、これはなかなかご馳走だ。

すでにリビングのテーブルには母と妹が座っていた。意外そうな顔で父がそちらを見るので母が、

「ご飯を作ってくれるんだって」

と嬉しそうに言った。

僕はテーブルにできあがった食事と昨日の残りのサラダを置いて、席に着く。

「いただきます！」

僕の声と共にみんなが同時に食べ始めた。うん、おいしい。自分で作ったものはなんでこんなにおいしく感じるのだろうか。いや、母の作ってくれた料理もおいしかった。美咲の料理もおいしかった。「すごくおいしい」

家族が笑ったのを見て、僕もつられて笑った。

「早いものだな・・・孝介がもう結婚なんて」

みんなが寝静まった後、リビングで父がつぶやいた。僕はというと、もう寝なきやいけないのにちっとも眠れなかった。父の言葉にうなづく。

「俺もびつくりだよ。20歳で結婚」

去年の僕は結婚なんて考えていなかった。最初に女の人とつきあったのは高校生のときだった。告白されたことなんて初めてだったし、仲の良い人だったから好きになった。2度目はサークルの後輩。やっぱり告白されてつきあいだした。みんないい人だった。美咲には・・・僕から告白して、僕からプロポーズして、一生一緒にいたいと思った。

「思えば、父さんと美咲のおじいさんの策略で見合いさせられたんだよな。今思うとなんか複雑だよな」

「父さんたちのおかげでまた会えたんだろ。むしろ感謝してほしいよ」

つーんと父は言い放つ。

「うん。感謝してる。ほんとに」

僕は一っと笑う。そうだ、あのとき見合いで再会しなければ、僕たちはずっと他人だったんだ。

そのとき、父がにっこり笑って僕の頭をぽんぽんと頭を叩いた。

「孝介、幸せになりなさい。親はいつだって子供の幸せを願ってるんだから」

十分幸せだ。今までだって、これからだって。

胸の奥に何かを感じた。僕はただこくんとうなずいた。

僕たちは明日結婚する。

第20話 結婚前夜（後書き）

ドラえもんのような題名になりましたね。

いよいよ次で最終回を迎えます。

その後、番外編を1つ書こうと思っているので
たぶんあと2話くらいで終わると思います。

ここまで付き合ってくださいありがとうございます。

最終話 おしどり夫婦へ（前書き）

彼らは辿り着きます。

おしどり夫婦へ・・・

最終話 おしどり夫婦へ

4月24日。その日は雲一つない快晴だった。

僕は9時半頃に式場に着くように家を出た。たぶん美咲は着付けにもっと時間がかかるのでもっと早くに出ているはずだ。あとでウエディングドレス姿を見るのが楽しみだった。準備ができると、僕は司会者やスタッフに挨拶をして回った。

10時少し前、僕と美咲の両親が式場に入ってきた。母の着付けの準備があるため、多少の時間がかかる。その間に、僕は美咲の控え室に移動した。

スタッフに連れられて、部屋の中に入る。

「どうぞ」

扉が開くと同時に、中にいた人が何人が振り返るのが見えたが、僕はその中の美咲に釘付けになった。そして、彼女も僕をまっすぐに見つめてくれた。僕らだけが僕らだけを見ていた。

美咲は大きな鏡の前に座っている。白いウエディングドレス。まとめられた黒い髪の毛がドレスによく映える。白い肌がまぶしいくらい綺麗だった。

スタイリストやスタッフが気を遣って控え室を出て行った。

「かっこいいじゃん」

先に口を開いたのは美咲だった。僕の見慣れない格好を見て言っているのだ。

「美咲はめっちゃ綺麗だ」

堂々と言うと、美咲は少し照れながら、いや照れて固まってしまった。その反応に僕は驚いた。

「え・・・どうしたの？」

「ちよつと・・・緊張してきた・・・こんなに緊張することなんてあんまないのに」

ひらひらしたドレスを大胆にぱつと広げて彼女はつぶやく。

「昨日はよく眠れた？」

「全然。早めに寝たんだけど、全然寝れなかった」

「俺も。緊張して寝れなかった」

苦笑して近くのイスに座る。ドラマでよく見ていた結婚がこんな緊張するものだったなんて思ってたのだったのだ。

「これ、夢じゃないんだよな・・・？昨日家族と過ごしてるときにこれが日常のような気がして・・・孝介と結婚するっていうのが夢に思えてきたんだ。寝ようと思ってても明日これはじつはドッキリでした」とか、結婚詐欺だ」とか」

言いながら美咲がパニックになりつつあるのがわかった。僕は慌てて彼女を抱きしめる。

「夢じゃない。もうすぐ俺たちは結婚するんだ。明日、婚姻届を出して正式に夫婦になるんだよ」

僕の腕の中で落ち着きを取り戻した美咲。キスしたいと思ったが、今日の誓いのキスマでとっておこうと考えた。僕は美咲を放した。

「ちよつとは落ち着いた？」

美咲はにっこりと微笑んでこくんとうなずいた。

美咲の家族が来たのはそれからすぐのことだった。お父さん、お母さん、美花、おじいさん、それから僕の知らない親戚と思われる人もいる。僕も美咲も改めて挨拶をした。しばらくして僕の家族も控え室に入ってきて、それぞれ挨拶をした。

「孝介君」

美咲のお父さんに部屋の隅に呼ばれてびくつとなる。最後に殴られるのかと思いきや、

「君にはいろいろ失礼なことをしてしまった。こんな私が言うことではないのかもしれないが、父親として1つ言わせてほしい。美咲と一緒に幸せになりなさい」

その言葉が胸に響いた。そうだ、結婚したら僕はこの人の息子に

もなるんだ。それはなんだかむずがゆくて、でも嬉しかった。

10時半、拳式のリハーサルが始まり、すぐに招待客がやって来た。

美咲の女友達も大勢来ていたが、どんなコネなのか国会議員までもが来ている。僕が呼んだのは同じ学校だった友達ばかりだ。

いっぱい冷やかされたが、いっぱい祝福された。

久しぶりに会った友達に、僕のこの早い結婚が子供ができたからと勘違いしていた人もいたが、とりあえず否定をしておいた。

そして、控え室にいと、スタッフに時間だと呼ばれた。

いよいよ緊張感が高まった。

扉が開いた。2人の影が逆光になって見える。美咲とお父さん。ゆっくりと歩いてくる。お父さんに連れられて、僕のお嫁さんとなる人が歩いてくる。

美咲は伏し目がちに、でもちゃんと顔を上げている。

バージロード。僕はその先で待つ。

緊張した。心臓がばくばくと高鳴る。落ち着け自分。大丈夫。緊張するな。

やがて、2人が僕の前まで来た。美咲のお父さんと目が合った。

お父さんはしつかりとお辞儀をして、美咲を僕に任せる。僕はアイコンタクトをしてから、彼にお辞儀をした。

そして、美咲と目を合わせる。彼女は僕の腕を取る。

この瞬間、なにかのバトンが渡されたような気がした。

僕たちは神父に向き直った。

誓い合う。僕らは誓った。

緊張した空気の中で、僕は美咲と出会ってからのことを思い出し

たいた。

トンネルの中で襲いかかってきたとき、お見合いで再会したとき、初めてのデートのときに見せた人間らしい顔と一瞬だけ見せた泣きそうな顔、初めて抱いた夜、いなくなつた美咲と再会して自分たちの気持ちを確かめ合つたとき、プロポーズを受けてくれたとき、ヤキモチをやいた彼女の顔、いつだって傍にいてくれた美咲。

ずっと傍にいたい。この人と結婚したい。

僕は彼女のベールを上げる。上目遣いに僕を見てくる。僕らは見つめ合つた。

ゆっくりとゆっくりと、人生最高のキスをした。

僕らは誓つた。一緒に幸せになると……………

今日、僕らは結婚した。

これはスタートだ。僕らの新しい第1歩がここから踏み出される。一緒に、幸せになる。

ずっと、2人で……………

最終話 おしどり夫婦へ（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。
とりあえず一件落着です？うん。

結婚はゴールではないんです。
幸せな結婚をしたいものです。

この後、新婚旅行編を書きたいと思っています。
新婚後、初旅行ですからいちゃいちゃします・・・
もしよろしければ、もう少しお付き合ってください。

番外編 新婚旅行（前書き）

これがほんとの最終話です。

番外編 新婚旅行

飛行機に乗ること約6時間。海外に行ったことのない僕にとってそれは人生で1番の長旅だった。

「すげー海だ海！美咲も見てみるよ！」

白い雲の世界から景色は一変。下は真っ青な海が広がっていた。

窓際に座っているのは美咲だったが、僕は彼女を通り越して外を眺めている。

「ちよつとは落ち着けよ。飛行機なんてそんな珍しいもんじゃないだろ」

小さい子供を相手にするように美咲は言い放つ。新婚旅行前に聞いた話だが、彼女は幼い頃からすでに海外を旅行しまくっているらしかった。そんな世界とは無縁だった僕にとってはまるで信じられなかった。

着陸後、海外慣れした彼女について行き、無事に荷物を持って空港を出た。自分1人だったら絶対に迷うところを美咲は看板を見ながら危なげなく進んでいく。ついでに言えば、どうやら英語を喋れるらしかった。

「別にそんなに話せるわけじゃないよ。こついう所で困らない程度にしか喋れない」

十分ではないだろうか？

美咲は空港から出た所で、誰かを待っているようだ。

「誰か待ってるの？」

試しに聞いてみると、美咲はこくんとうなずいた。

「徹のキョーダイ。忍^{しの}だよ。新婚旅行で行くついたら、運転手になるって言ってくれたんだ」

せっかくの新婚旅行なんだから2人きりで過ごしたかったが、旅行に関しては彼女に任せてしまったので文句を言うことができない。

しばらくして、黄色い車が僕たちの目の前で停まった。ドアが開いて、中から茶髪のショートカットに黄色いサングラスをかけて、男だか女だか見分けのつかない格好の人間が現れた。

「やあ、美咲！久しぶり！」

サングラスをとったその顔は・・・男の僕から見ても実に中性的な顔だった。綺麗な顔立ちをした男とも女ともとれる。化粧をしている様子も全くない。しかし、男の直感でこの人は女性だと思った。「忍！久しぶり。元気だったか？」

美咲が嬉しそうに駆け寄る。あるうことか2人はそのまま抱き合ってしまった。僕があつと固まっていると、忍さんがすぐに気づいて美咲とのハグをやめた。

「ごめんごめん。旦那さんがヤキモチやいちゃうね」

くすくすと笑いながら忍は僕に向き直る。このとき女の人だと直感した。

「はじめまして。美咲の同級生だった高見忍です。老けて見られるけど、21歳です。よろしくお願いします」

好意的な彼女の挨拶に僕は安心した。

「こちらこそはじめまして。葉山孝介つていいいます。俺も21です。僕はぺこつと頭を下げたが、もう忍は僕のほうなんて見ていないか。美咲と楽しく会話をしている。」

「まっさか美咲がこんなに早く結婚するとはな・・・式に行けなくてごめんな。大学のテストがあつたんだよ」

「いいよ。今日会えたし」

「・・・なんか美咲、変わったね・・・」

忍の言葉に美咲はきよとしたような表情に変わる。確かに、と僕は思った。出会った頃の美咲は人前で堂々とつまようじで歯の掃除をしていたくらいだ。最近はそれをしないので変わったと言えるかもしれない。

「そうかな？自分ではそんなに変わったと思わないけど」

「ははっ！でもちよつと丸くなったよ！もしかして毎日ラブラブな

夜を過ごしてるの？」

「なわけないでしょ!!」

精一杯否定していたが、美咲の顔は真っ赤だった。まあ、でも、毎日一緒に寝ていますが、忍さんの考えているようなことは一切やっていませんが。

「さーて、立ち話もなんだし、行こっか！バンコクの名所を案内するよ」

そして、僕たちは車に乗り込んでスタートした。

スタートしたはいいものの、僕はなんだか居場所がなかった。

まず、車に乗る位置からして失敗した。後部座席に乗ったのは僕1人で、美咲は助手席、忍さんは運転席に座ってしまったのだ。当然、会話から1人放り出される形になるし、話す内容が懐かしの思い出話でどのみち僕は入ることができない。

後部座席でおとなしく景色を眺めていると、美咲がねーと話しかけてきた。

「最初はワットプラケオでいいか？」

次に行く場所を話していたらしい。タイで有名な王宮だとわかった僕はいいよと笑ってうなずいておいた。

その後も、公園や水族館、タイの舞踊を見て、1日目は終了した。日本とは違う文化に感動したが、なんだか物足りないような気もした。車の中で、帰ろうかという話になって、突然忍さんが大声をあげた。

「えええっ!?! てつきり家に泊まるんだと思ってたよ! ホテル代とかもつたいなくない?」

「そうだけど、もう予約しちゃったし」

美咲が困ったように笑う。

「電話してキャンセルすればいいじゃん! 私が代わりに電話したげるよ。2人とも家に泊まってきなよ。いいですよね!?! 葉山さん!」

突然話を振られて僕は驚く。立場的に強いことが言えなくて、僕は曖昧あいまいに笑っておく。肯定することも否定することもできなかった。「忍、ありがとう。でも、そこまでお世話になれないよ。それにこのホテルの料理がすごくおいしくて聞いたんだ。それも食べてみたいしさ」

「そつか。わかった。じゃあ明日ホテルまで迎えに行くよ」

「なんかごめん？」

「いいっていいってというような会話を僕は黙って聞いていた。」

4泊5日の新婚旅行がこんな感じに進んでいくのだろうかと思うと、僕はテンションが下がるのを感じた。美咲の友人がいろいろな観光名所を案内してくれるのは嬉しい。だけど、これじゃあ新婚旅行のような気がしないのだ。

ホテルにチェックインし、先にお風呂に入った美咲はパジャマ姿で出てきた。僕はベッドに座っていて、これからのことを考えていたため気づかなかった。美咲が隣に座って初めて気がついたのだ。

「あ、もうお風呂出たんだ」

自分も風呂に行く準備をしようと立ち上がるうとしたとき、かなり強引に美咲に腕を引かれてベッドに押し戻された。

「今日楽しくなかった？」

そんな質問を真顔でされて、一瞬言葉に詰まった。だけど、僕はふるふると首を振った。

「楽しかったよ。海外なんて初めてだったし」

ウソではない。でも、すごくすごく楽しかったわけでもない。

「本当のこと言ってよ。孝介が楽しくないと、私まで楽しくなくなる。どうすれば楽しくなるんだよ……」

「……」

「孝介」

促されて、僕は心の奥で何かを決め込んだ。

「じゃあ美咲といちゃいちゃしたい」

9 割方冗談で言ったのだが、美咲が急にパジャマのボタンをはずしだしたことに驚いて、慌てて制する。

「冗談だって！いやいやされたって嬉しくないし、余計楽しくなくなるよ！」

「じゃあどうすればいいんだよ！？」

「俺はもつと・・・もつと新婚旅行がしたかった・・・これじやあ3人で旅行じゃん」

駄々をこねる子供みたいだった。でも、言ってしまったものはしょうがない。しょうがないのだが、この後が続かなかった。僕は情けなくうなだれる。

「あ・・・忍は明日はもう一緒に行動しないよ。迎えには来てくれるけど・・・」

美咲が戸惑いながら話すのを聞いて、僕は後悔し始めていた。久しぶりに会った友人と喋っていたのは当然だ。その友達を否定するようなことを言ってしまったのだ。自分はなんて最低な人間なんだろうか。

「ごめん・・・そんなつもりで言ったんじゃないんだ」

「わかってるよ。私が反対の立場だったらキレてるけど、なんで孝介は怒らないんだよ・・・」

予想外の展開に僕は目をぱちくりとさせた。そして、何かに気づいた。

「そりゃあ決まってるじゃん。俺は美咲が楽しくなくなると嫌なんだよ」

服も脱がずに浴槽のシャワーを流す。僕は音も立てずに風呂場を出た。

そして、ベッドの上でホテルの電話を使おうとしている美咲の腕をがしつと掴む。彼女は驚いた顔で僕を見た。美咲のウソには気づいていた。

「孝介！」

「……ほんとは新婚旅行の間ずっと忍さんに運転手頼んでたんだろ？俺があんなこと言ったから今それを断ろうとしたんだろ？だめだよ。俺は美咲が楽しくないのは嫌なんだよ。そんなことすんなよ……」

本心だった。僕はそんなことを望んでいたわけではない。それじやあ意味がないんだ。お互いに楽しみたいんだ。

美咲は受話器を置いた。それから、僕を見て申し訳なさそうにする。

「それに俺たちだけじゃタイで迷っちゃうからさ、案内役が必要だよ」

にっと笑って言うと、美咲は嬉しそうにうなずいてから、ありがとうとお礼を言った。

やっぱり美咲が嬉しそうにしているのが僕にとって一番楽しくなることのようにだった。

しかし、翌朝、僕は豪快に起こされた。ちょうど服を何も着ていないときに布団を引っぺがされた。僕はわーとかきゃーとか意味不明な悲鳴をあげて小さくなってしまった。それも布団を取り上げたのは、美咲ではなく忍だったのだ。

「なっ何するんですか！」

「いつまで寝てんのさ！もう朝だよ！サワッディーカップ！……」

「……はあ、これを美咲に入れたのかー。痛そー……」

「なるとやめてほしいことを言われ、僕はすぐに服を着る。」

「なるべく痛くしないようにはしています」

答えながら、どうやってここに入ったのか気になってしまった。それから、ふとあることに気づいた。サワッディーカップは男性が使う挨拶だ。女性の場合は、サワッディーカになるはずだ。

「忍さんって男なんですか？」

「そっだよ。言っただけ？」

「けろりとして言う忍。なぜか騙されたような気分になった。」

「でも、美咲は変わったねー・・・前はもつと警戒心の強い猫みたいな感じだったけど、今は女の人になってた。ただ、マジであんたのことが好きみたいだな」

忍が言い終えたとき、美咲が部屋に入ってきた。忍は嬉しそうに彼女を出迎える。

「よっしゃ！今日もじゃんじゃん回るぞー！！」

1人はりきっている忍。少し僕を気にしながらも嬉しそうにする美咲。僕は・・・楽しくて顔が笑っていた。

こんな新婚旅行も悪くないか・・・そんなふうに僕は思い始めていた。

番外編 新婚旅行（後書き）

これまで孝介と美咲を見守ってくださってありがとうございました。

新婚旅行編だけ番外編にしたのは、

たぶんあくまでこの話が結婚をゴールにするような

スタートにするようなで進んでいたからです（意味不明）

この話はもう終わりですが、また思い出したときにも
目を通していただけるとすごく嬉しいです。

ありがとうございました

廉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0166e/>

おしどり夫婦へ

2010年10月8日11時15分発行